

---

# 薬屋のひとりごと

うりぼう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

薬屋のひとりごと

### 【コード】

N9636X

### 【作者名】

うりぼう

### 【あらすじ】

薬草を取りに出かけたら、後宮の女官狩りに遭いました。

花街で薬師をやっていた猫猫は、そんなわけで雅なる場所で下女などやっている。現状に不満を抱きつつも、奉公が明けるまでおとなしくしていようと思うのだが、彼女の好奇心と知識はそうはさせない。

ふとした事件を解決したことから帝の寵妃や宦官に目をつけられる

ことになる。

早く市井に戻りたい、猫猫はきょうも洗濯籠を片手にため息をつくのだった。

## 1 猫猫

(露天の串焼きが食べたいなあ)

曇天を見上げて猫猫は溜息をついた。

周りは自分が今まで見た中で最も美しくきらびやかな世界、そして瘴気蠢く濁った澱の中だった。

(もう三か月かあ、おやじ、飯食ってんだろうか)

先日、薬草を探しに森に出かけてみれば出会ったのは、村人その壹、貳、参という名の人さらいでした。

まったく強大で迷惑極まりない結婚活動、略して婚活、宮廷の女狩りである。

まあ、給金はもらえるし、二年ほど働けば市井に戻れなくもないので、就職先としては悪くないのだが、それは個人の意思で来た場合である。

薬師としてそれなりの生活をしていた猫猫マオマオにははた迷惑な話なのだ。

人さらいどもは、妙齡の娘を捕まえては宦官に売り酒代を稼いだかそれとも己の娘の身代わりにさせたのか猫猫にはどうでもいい話である。どんな理由があれ、とぼっちりを受けたのは変わらないのである。

でなければ、後宮なる場所に一生関わりたくなかった。

むせ返る化粧と香、美しい衣に纏った女官の唇には薄っぺらい笑み

が張り付いていた。

薬屋をやっけてきて思うこと、女の笑みほど恐ろしい毒はないと。それは殿上人の住まう御殿も城下の花街も変わらないのだと。

足元に置いた洗濯籠を抱え、建物の奥に向かう。表とは違い、殺風景な中庭には石畳の水場があり、男とも女ともつかない召使たちが大量の洗濯物を洗っていた。

後宮は基本男子禁制である。入れるのは、国で最も高貴なかたとその血縁、あと大切なものを失った元男性だけである。もちろん、そこにいるのは後者である。歪だと思いつつ、それが利になっっているからやっていることなのだろうと猫猫は考える。

籠を置くと、そばの建物の中にある並べられた籠を見る。汚れ物ではなく、日の当たった洗濯済みのものだ。

持ち手にかけられた木札を見る。植物を模した絵と数字が書かれている。

女官の中には字が読めないものもいる、なんせ人さらいのごとく攫われたものさえいるのだから。宮廷に連れ込まれる前に最低限の礼儀くらいは教えられるが、文字となると難しい。識字率は田舎の娘で半分越せばいいほうなのである。

大きくなり過ぎた後宮の弊害といえる、量は増えたが質が悪い。先帝の花の園には到底及ばないものの、妃、宮女合わせて二千人、宦官を加えると三千の大所帯だった。

猫猫はその中で最下層の下女であり、官職すらもらっていない。特に後ろ盾もなく、攫われて数合わせにされた娘にはそれが妥当なところである。まあ、牡丹のような豊満な肉体や、満月のような白い肌でも持っていればまだ、下妃の位につける可能性もあったかもしれないが、猫猫の持つのはそばかすの浮いた健康的な肌と枯れ枝のような手足くらいである。

(はやく仕事終わらせよう)

梅の花と『吉七』と書かれた札の籠を見つけると、小走りに歩く。重く曇った空が泣き出す前に部屋に戻りたかった。

籠の洗濯物の主は、下級妃嬪である。与えられた個室は他の下妃に比べ調度の質が豪華だが派手すぎる。部屋の主は、豪商の娘かなにかと予想される。位持ちともなれば自分専用の下女を持つことができるが、位の低い妃はせいぜい二人までしか置くことができない。ゆえに、猫猫のような特に仕えるべき主人のいない下女がこうして洗濯物を運んだりするのである。

下級妃嬪は後宮内で個室を持つことを許されているが、場所は宮内の端にあり、皇帝の目につくことはめったにない。それでも、一度でも夜伽を命じられれば部屋の移動ができ、二度目の御手付きは出世を意味している。

一方、食指を動かされることなく適齢を過ぎた妃は、よほど実家の権力がない限り位が下げられるなり、最悪、下賜されてしまう。それが不幸かどうかは相手にもよるが、宦官に下賜されることを宮女たちは一番恐れているようだ。

猫猫は扉を軽く叩く。

「そこにおいといて」

扉を開け無愛想な返事をするのは、部屋付の侍女だった。中では、甘ったるい匂いを漂わせた妃が酒杯を揺らしている。

宮内に入る前は誉めそやされた美しい容姿であるが、所詮、井の中の蛙だったのであろう。絢爛の花々に気圧され、鼻っ柱を折られ、最近では部屋の外にも出ようとしなくなった。

(部屋の中じゃあ、だれも迎えに来てくれないよ)

猫猫は隣の部屋の洗濯籠をもらうと、また洗い場に戻った。

仕事はまだたくさん残っている。

好きできたわけではないが、お給金はいただいているのでその分の働きはするつもりである。

基本は真面目、それが元薬屋猫猫である。

大人しく働いていればそのうち出られる。

まさか、御手付きになることはありえないだろう。

残念なことに猫猫の考えは甘かったといえる。

何が起るかわからない、それが人生というものだ。

齢十七の娘にしては達観した思考の持ち主であるが、それでも抑えられないものがあった。

好奇心と知識欲。

そして、ほんの少しの正義感。

この数日後、猫猫はある怪奇の真相を暴くことになる。

後宮で生まれる乳幼児の連続死。

先代の側室の呪いだと言われたそれは猫猫にとって怪奇でもなんでもなかった。



## 2 二人の妃

「あーあ、やっぱりそうなんだ」

「ええ、お医者様が入っていったのを見たって」

汁物をすすりながら猫猫は耳を傾ける。広い食堂には数百人の下女が朝餉をいただいていた。内容は汁物と雑穀の粥である。

斜め前に座っている下女が噂話を続ける。気の毒そうな表情をしているが、それ以上に好奇心が目の奥で輝いていた。

「玉葉ギョクメイさまのところも、梨花リファさまのところにも」

「うわー、二人ともなんだ。まだ、半年と三か月だっけ？」

「そうそう、やっぱり呪いなのかしらね」

でてきた名前は、皇帝のお気に入り妃たちの名前である。半年と三か月というのはそれぞれが生んだ宮のことであろう。

宮内では噂話が闊歩する。それは、帝の御手付きの宮女の話やお世継ぎについて、はたまたいじめや僻みによる悪評もあれば、うだる暑さにふさわしい怪談めいたものまである。

「そうよね、でなければ三人も亡くなられるわけないわ」

それは、妃たちの生んだ子ども、つまり世継ぎとなられる宮たちのことを指していた。東宮時代に一人、皇帝になられてから二人、どれも乳幼児のころに見まかられている。幼子の死亡率が高いのは当たり前であるが、殿上人の子が三人ともとなるとおかしい。

現在、玉葉妃と梨花妃の二人の子どもだけが生き残っている。

(毒殺ではなかるうか?)

白湯を含みながら猫猫は考えるがそれは違つと結論に至る。

三人の子どものうち、二人は公主だつたからだ。男子にのみ継承権の与えられる中で、姫君を殺す理由などほとんどない。

前に座っている二人は箸も進めず、呪いだの祟りだの言っている。

(だからといって呪いはねえ)

くだらない、その一言である。呪いをかけるだけで一族郎党皆殺しとなる法まである中に猫猫の考えはむしろ異端といえる。しかし、猫猫の頭にはそれが言い切れる根拠となる知識があつた。

(なんらかの病気か?もしかして遺伝的なもの?どういつふうに亡くなられたのだらう?)

無愛想で無口と言われた下女がおしゃべりな下女たちに話しかけたのはそのときだつた。

好奇心に負けて後悔するのはそれからしばらくのことである。

「くわしくは知らないけど、皆、だんだん弱つていつたつてきくわ

おしゃべりな下女、小蘭は猫猫が話しかけてきたことに興味を持つたらしく、その後もことあるごとに噂話を教えてくれた。

「お医者さまの訪問回数から、梨花さまのほう heavier のかしら？」

窓の棧を絞った雑巾で拭きながら言った。

「梨花さまご自身？」

「ええ、母子ともによ」

医師が梨花妃のほうに出向くのは、病の重さというより東宮だからであろう。玉葉妃の子は公主である。

帝のご寵愛は玉葉妃のほうに重いが、生まれてくる子に性差があればどちらを重きに置くかは明白である。

「さすがに詳しい症状はわからないけど、頭痛とか腹痛とか、吐き気もあるっていうけど」

小蘭は知っていることをすべて話すと満足したらしく、次の仕事に向かう。

猫猫はお礼代わりに、甘草入りの茶を渡す。中庭の隅に生えていたもので作ったのだ。薬臭いが甘味は強い。甘味を滅多に食べられない下女はとても喜んでくれた。

（頭痛に腹痛に吐き気か）

思い当たる症状だったが、決定打はない。

予測だけで物事を考えるのはいけないと、散々おやじどのから言われていた。

（ちいとばかり、行ってみるか）

猫猫は手早く仕事を終わらせることにした。

後宮と一括りに言ってもその規模は広大である。常時、二千人の官女に、泊まり込みの宦官は五百をこえる。

猫猫たち下女は大部屋に十人単位で詰め込まれているが、下妃は部屋持ち、中妃は棟持ち、上妃は宮持ちと大きくなり、食堂、庭園を含めれば地方都市よりもずっと広いのだ。

ゆえに、猫猫は自分の持ち場である東側を出ることはない。用事を言いつけられたときぐらいしか離れる暇はない。

（用事がなければ作ればいいだけ）

猫猫は籠を持った女官に話しかける。女官の持っている籠には、上等の絹が入っており、西側の水場で洗わねばならなかった。水質に差があるのか、それとも洗う人間の違いなのか、東側で洗うとすぐに傷んでしまうのである。

猫猫は、絹の劣化は陰干しするかしないかの違いだとわかっていたが、それをいう必要はない。

「中央にいるというものすごく綺麗な宦官を見てみたい」

小蘭からついでに聞いた話をすると、快くかわってくれた。色恋の刺激の少ないここでは、宦官ですら刺激の対象になるらしい。女官を辞めた後、宦官の妻になるという話はちらほら聞く。女色に比べればまだ健全なのだろうが、やはり首を傾げてしまう。

(そのうち自分もこうなるのだろうか?)

己の問いかけに猫猫は腕を組んで唸った。

足早に洗濯籠を届けると、中央に位置する赤塗の建物を見る。東のはずれよりも洗練された、手の込んだ宮殿である。

現在、後宮で一番大きな部屋に住むのは、東宮のご生母梨花妃である。帝が后を持たぬ中、男児を唯一持つ梨花妃がここの最高権力者といえる。

そんな中、見えた光景はさほど市井と変わらないものだった。

罵る女とうつむく女と狼狽える女たちと仲裁する男である。

(妓楼とあんまり変わらないな)

至極冷静な感想を持ち、第三者、つまり野次馬に加わる猫猫。

罵る女は後宮の最高権力者で、うつむく女はそれに次ぐ存在、狼狽えるのは侍女たちで、仲裁に入るのはずで男でなくなった薬師だと、周りのささやきと風貌からわかった。

「おまえが悪いんだ。自分が娘を産んだからって、吾子を呪い殺す気だろう!」

美しい顔は歪むとそれは恐ろしいものになる。幽鬼のような白い肌と悪鬼のごときまなざしは、頬に手を添える美女に向けられている。

「そんなわけないとわかっているでしょう。小鈴も同じように苦しんでいるのですから」

赤い髪に翡翠の目を持つ女性は、冷静に答える。西方の血を色濃く継ぐ玉葉妃は顔を上げると医者顔を見る。

「ですので、娘のほうの容体も見ていただきたいのです」

仲裁に入ったものの原因は医師にあるらしい。

医者が東宮ばかり見て、自分の娘を見ないことに抗議をしにきたようである。

母親としてはわからなくもないが、後宮という仕組みから男児優先は当然である。

医師にしてみれば、いわれのないと言いたい顔であるのだが。

（馬鹿だろう、あのヤブ）

妃二人のあんなに近くにいて気づかないとは。いや、それ以前に知らないのか？

乳幼児の死亡、頭痛、腹痛、吐き気。そして、梨花妃の白い肌とおぼつかない身体。

ぶつぶつとひとりごとをつぶやきながら、猫猫は騒動の場を後にした。

（なにか、書き物はないか）

と、考えながら。

よって、通り過ぎる人物に目もくれなかった。

### 3 壬氏

「またやってますね」

壬氏<sup>ジンシ</sup>は端正な顔に憂いを含む。女性と見まごうような繊細な輪郭に、切れ長の目、絹の髪を布で包んで残りを背中に流している。

宮中の花たちがこんなところで騒ぎを起こすなどはしたない、それを収めるのが彼の仕事の一つだった。

人だかりを分けようとする中、一人だけ我関せずという雰囲気歩いてくるものがある。

小柄な下女で鼻から頬にかけてそばかすが密集している。目立った風貌ではないものの、自分に目もくれずなにかひとりごとをいう姿が印象に残った。

ただ、それだけのはずだった。

東宮が身まかられたという話が回ってきたのは、それからひと月もしない頃であろうか。

泣きわめく梨花<sup>リファ</sup>妃は、先日よりもさらにやせ細り、大輪の薔薇といわれた頃の面影はなかった。息子と同じ病に侵されていることは明白である。

あれでは、次の子を望むこともできまい。



東宮の異母姉である鈴麗<sup>リンレイ</sup>公主は、一時の体調不良から状態を持ち直し、母とともに東宮を失った帝を慰めるようになっていた。帝の通いようから次の子も近いかもしれない。

同じように公主と東宮は原因不明の病にかかっていた。一方は持ち直し、一方は倒れた。

年齢による違いであろうか、三か月の差とはいえ乳幼児の体力には大きく影響を受ける。

しかし、梨花妃はどうであろう？

公主が持ち直したのなら、梨花妃も持ち直してもいいであろうに。それとも、息子を亡くした精神的なものであるうか。

壬氏は頭にぐるぐると考えをめぐらせながらも、書類に目を通し、判を押していく。

なにか違いがあるとすれば玉葉<sup>ギョクキョウ</sup>妃のほうだろうか。

「少し留守にする」

最後の判を押し終わると、壬氏は部屋を後にした。

蒸したての万頭のような頬をした公主は、赤子の無邪気な笑顔を見せる。小さな手のひらはぎゅっと拳を作り、壬氏の人差し指を掴んでいた。

「これこれ、はなしなさい」

赤毛の美女は優しく娘をおくるみに包むと、籠の中に寝かせた。赤子は暑いとおくるみをはねのけ、来訪者のほうを見ては言葉にもならない声を機嫌よく鳴らしていた。

「なにか聞きたいことでもあるようですが」

聡明な妃は、壬氏の思惑を感じ取っているようだ。

「なぜ、公主殿は持ち直されたのですか？」

単刀直入に申し上げると、玉葉妃はふっと小さな笑みをこぼすと懐から布きれを取り出した。

はさみも使わず裂いた布に、不恰好な字が書いてある。字が汚いというわけではなく、草の汁を使って書いたため、にじんで読みにくくなっているのだ。

『おしろいはどく、赤子にふれさすな』

たどたどしく書いたのもわざとであろうか？

壬氏は首を傾げる。

「おしろいですか？」

「ええ」

玉葉妃は乳母に公主を任せると、引出から何かを取り出す。布にくるまれたそれは、陶器製の器だった。蓋を開けると、白い粉が舞う。

「おしろい？」

「ええ、おしろいです」

ただ白いだけの粉になにがあるのだろうか。そういえば、玉葉妃は元々肌が美しいのでおしろいをしておらず、梨花妃は顔色が悪いのをごまかすように塗りたくっていた。

「公主は食いしん坊でして、私の乳だけでは足りず、乳母に足りない分を飲ませてもらっていたのです」

赤子を生まれてすぐなくしたものを、乳母として雇い入れたのだ。

「それは、乳母が使っていたものです。ほかのおしろいに比べて白さが際立つと好んで使っていたものです」

「その乳母は？」

「体調が悪かったようなので暇を出しました。退職金も十分与えたはずですよ」

理知的で優しすぎる妃の言葉だ。

おしろいの中には鉛白を使われているものがある。おしろいの白さが際立つそれは、体の中に入り中毒症状を起こす。

使うものが母親ならば、胎児に影響を与え、生まれた後も授乳の際口に含むこともあるだろう。

壬氏も玉葉妃もそれがどんなものかわからない、ただそれが東宮を殺した毒だということは理解できた。

「無知は罪ですね。赤子の口に入るものなら、もっと気にかけていればよかったです」

「それは私も同様ですよ」

結果、帝の子を四人も失わせてしまった。母の胎内にいたものを加えたら、もつといるのかもしれない。

「梨花妃にも伝えましたが、私が何を言っても逆効果だったみたいですよ」

梨花妃は今も目にくまのはった顔色の悪い肌をおしろいで塗りたくっている。それが毒とも知らずに。

壬氏は生成りの布きれを見る。不思議とどこかで見覚えがあるような気がする。

ただたどしい字は、筆跡をごまかすようにも見える。しかし、どこかしら女性的な文字に見えた。

「いったい、だれがこんなものを」

「あの日、私が薬師に娘を見てもらうようにいったときです。結局、貴方の手を煩わせたただけの後、窓辺に置いてありました。石楠花の枝に結んで」

では、あの騒動が原因でなにかしら気づいたものが助言したというのだろうか。

「宮中の医師にそのような遠回しなことをするかたはいらっしゃられないでしょう」

「ええ、最後まで東宮の処置がわからないようでしたから」

あのときの騒動。

そういえば、野次馬の中にひとりわれ関せずという下女がいたというのを思い出した。

なにかをぶつぶつ言っていた。

なにを言っていた？

『なにか、書き物はないか？』

ふと、なにかが頭の中につながった。

くくくつと、笑いがこぼれる。天女のような艶やかな笑みが浮かんだ。

「玉葉妃、この文の主、見つけたらどうなさいます？」

「それはもう、恩人ですもの。お礼をしなくてはね」

「了解しました。これはしばらく預かってよいですか」

「朗報を期待します」

壬氏はさわり心地のある布に記憶をたどらせた。

「寵妃の願いとあらば、必ずや見つけねばならぬな」

天女の笑みに、宝探しをする子どもの無邪気さが加わった。

#### 4 天女の微笑（前書き）

役職とか規則とか深く考えずに読んでいただけると助かります。

#### 4 天女の微笑

東宮が身まかられたのを知ったのは、夕餉の際に黒い帯が配られたときだった。

喪に服す意味合いで七日間つけるのである。

その際、食事にはただでさえ少ない肉類が全くなかったので口をとがらすものもいた。

端女の食事は一日二回、雑穀と汁物、時折、菜が一品振舞われる程度である。やせぎすの猫猫マオマオには十分な量であるが、足りないと思うものがほとんどだろう。

下女と一括りにいつてもいろんなものがある。

農民出身のものもいれば、町娘もあり、数は少ないものの官の娘もいた。親が官であればいくらか待遇はいいはずだが、それでも下働きの理由となると本人の素養の問題である。文字の読み書きもできないものを部屋持ちの妃にできるわけがない。妃というのは、職業である。

(結局、意味なかったのか?)

猫猫は東宮の病の原因を知っていた。

梨花リファ妃と侍女たちは真っ白なおしろいをふんだんに使っていた。庶民には手を出せない高級品だ。

それは妓楼の高級遊女たちも使っていた。一晩で農民一生分の銀を稼ぐ妓女もいる、自分で買うものもあれば、貢物としてもらうものもいた。

顔から首にかけて真っ白にはたかれるそれは、妓女の身体を蝕み、幾人かを死に至らしめた。

おやじが「やめろ」といつても使い続けたからだ。

やせ細り、衰弱して死んでいく妓女を猫猫はおやじのそばで幾人も見てきた。

命と美貌を天秤にかけ、結局どちらも失ったのだ。

だから手短な枝を折り、簡単な文を書いて二人の妃の元に置いた。

まあ、紙も筆も調達できない端女の書いた警告を信じるとは思えなかったが。

喪が明けて、だれも黒い帯が見かけられなくなった頃、玉葉妃の噂キョクヨウを聞いた。東宮を失い、傷心の帝は、生き残った公主を慈しんでいるらしい。

同じくわが子を失った梨花妃のもとに通う話は聞こえない。

(都合のよいことで)

猫猫は魚のかけらがほんの少し入った汁を飲み干すと、食器を片づけて仕事場に向かった。

「呼び出し、ですか？」

洗濯籠を抱えた猫猫は宦官に呼び止められた。

中央にある宦官長の部屋に来いとのこと。



宦官とは、後宮を大きく分ける三部門の一つであり、下位に位置する女官のことをいう。他の二つ、部屋持ちの妃たちは内官、宦官は内侍省にあたる。

（なんの用だろう？）

宦官は周りの下女にも話しかけている。どうやら自分だけではないらしい。

きっと人出が足りないのだろう。

猫猫は籠を部屋の前に置くと、宦官の後について行った。

宦官長の棟は後宮と外部をつなぐ五門のうち、ひとつのそばにある。帝が後宮に訪れる際、ここを必ず通る。

呼び出されたとはいえ、あまり居心地のいい場所ではなかった。ようは頭が高いというものである。

隣の内官長の棟に比べ幾分劣るものの、中級妃の棟よりも豪華な造りである。欄干の一つ一つに彫り物が施されており、朱の柱には鮮やかな龍が巻き付いている。

促されるまま部屋の中に入ると、大きな机がひとつあるだけで存外殺風景であった。中には猫猫たち以外の下女が十人ほど集まっており、不安となにかしらの期待とそしてどこか興奮したような表情を浮かべている。

「はい、ここまで。おまえらは帰っていいぞ」

(あれ?)

なぜだか不自然に区切られてしまった。猫猫のみ部屋に入り、残り  
の下女はいぶかしげに帰っていく。

定員というには部屋はまだ広いようであるが。

猫猫は首を傾げなら、周りを見ると女官たちの視線が一つに集まっ  
ていることに気付く。

部屋の隅に目立たぬように座る女性と、それに仕える宦官、少し離  
れて年嵩のいった女性がいる。中年の女性は宮官長であると記憶し  
ているが、それよりも偉そうな女性は何なのだろう。

(むむ?)

女性にしては肩幅が広く、簡素な服を着ている。髪を巾でまとめ、  
残りを下ろしている。

(男なのか?)

天女のような柔らかい笑みを浮かべ女官たちを見ている。隣に控え  
る宦官すら赤くなっている。

なるほど、皆が頬を染めるわけがわかる。

噂に聞いていたものすごく美しい宦官というのはこの男のことだろ  
うと猫猫は思った。

絹糸のような髪、流れるような輪郭、切れ長の目と柳のような眉を  
持った絵巻物の天女もこれほど美しくはあるまい。

(もったいないなあ)

顔を染めることなく思ったのがそんな言葉である。大切なものになくなってしまったので、子を成せないわけだ。あの男の子どもであれば、どれほど鑑賞に優れたものが生まれよう。

しかし、あれだけ人間離れした美貌があれば、皇帝も籠絡することもできるだろうと、不遜なことを考えていると、男は流れるような動きで立ち上がった。

机に向かい、筆をとると優美な動きでなにかをさらさらと書く。

につこりと甘露のような笑みを浮かべ、男は書き物を見せた。

猫猫は固まった。

『そのそばかすの女、おまえは居残りだ』

要約すればこんなことを書かれていた。

猫猫の動きを見逃さなかったのだろう。

満面の笑みが浮かんでいた。

男は書き物をしまつと、手のひらを二回叩いた。

「今日はこれで解散だ。部屋に戻っていいぞ」

下女たちはいぶかしみながら、後ろ髪ひかれながらも部屋を出る。先ほどの書き物が何の意味を示しているのかわからないまま。

部屋を出る下女たちが皆小柄で、そばかすの目立つ容貌をしていることに猫猫は気が付いた。しかし、書き物を見ても何の反応も示さなかったのは読めなかったのだろうか。

あの書き物は猫猫を指していたものではなかった。

他の下女とともに部屋を出ようとすると、がっしりと手のひらが肩に食い込んでいた。

恐る恐る振り向くと、まぶしくて目がつぶれるような天女の笑みがあつた。

「だめじゃないか。君は居残りだよね」

いつまでもなく有無を言わさなかった。

## 5 部屋付

「不思議だよねえ、話に聞くと君は文字が読めないってことになつてるんだけど」

「はい、卑賤の生まれでございますので。なにかの間違えでございましょう」

(面倒なので報告しませんでした)

とは、口が裂けても言わない。

しらばつくれる気満々である。

文字が読める、読めないで下女の扱いはそれぞれ違う。読めるほうが読めるほうで、読めないほうは読めないほうで役に立つのであるが、無知なふりをしていたほうが世の中立ち回り安いのである。

美しい宦官は壬氏ニハツと名乗った。

虫も殺さないような優美な笑みなのに、なにやら蠢くものを感じる。でなければ、こうして猫猫マオマオを窮地に立てることはできまい。

壬氏は黙ってついてこいといった。

首を横に振れば、軽く首がとぶ使い捨ての端女は素直についていくしかなく、なにがこれから起こるのか、それをどううまく対処するのか思いをめぐらせていた。

こうして壬氏に連れて行かれる理由に思い当たらないわけではなかったが、どうしてそれがばれたのか不思議だった。

妃に文を送ったことに。

わざとらしく王氏の手には、布きれがあった。それには、汚いけどどしい文字が書かれていることであろう。

字が書けることは誰にも黙っていたし、薬屋をしていて毒物に詳しいことも黙っている。いうまでもなく、筆跡でばれることはない。

周りを確認して置いてきたはずだが、誰かに見られていたということだろうか。

小柄でそばかすのある下女に目安をつけたのだ。

まず、先に文字が書けるものを集め、筆跡を集めたに違いない。字というものは崩して書いてもくせが残るものである。

その中に適合者がいないとなると、次は文字を書けないものを集める。

読める、読めないの判断は先ほどの通りである。

(なんて疑い深いんだ。つてか暇人すぎるだろ)

悪態をついているうちに目的地に到着した。

案の定、玉葉妃ギョクヨウキの住まう宮であった。

王氏が扉を叩くと、凜とした声が短く「どうぞ」といった。

中に入ると赤い髪の美女が柔らかい巻き毛の赤子を愛おしそうに抱いていた。

赤子の頬は薔薇色で、母親譲りの色素の薄い肌をしている。

健康そのもので、半開きの口から可愛らしい寝息が聞こえる。

「かのを連れてまいりました」

「お手数をかけました」

先ほどの崩れた口調ではない。  
分をわきまえた言動である。

玉葉妃は王氏とはまた違った温かい笑みを浮かべると、猫猫に頭を下げた。

猫猫は驚いて目を見開く。

「そのようなことをされる身分ではございません」

失礼のないように、言葉を選びながら述べる。

「いいえ。私の感謝はこれだけではありません。やや子の恩人ですもの」

「なにか勘違いなされているだけです。きっと人違いではありませんせんか」

冷や汗をかく。

丁寧に言ったところで否定ということに変わらない。

首ははねられたくないが、関わり合いにもなりたくない。長いものに巻かれたくないのである。

玉葉妃が少し困った顔をしたのに気付いた王氏は、ぴらぴらと布きれを見せつける。

「これは下女の仕事着に使われる布だっと思っていませんか？」

「そういえば、似ていますね」

あくまでしらばっくれる。  
無意味だとわかっていても。

「ええ、尚服に携わる下女用のものですね」

宮官は六つの尚に分けられる。衣服に携わるのが尚服で、洗濯係を主とする猫猫はそこに分けられる。

生成りの裳は、壬氏の持っている布と同じ色をしている。

裳の内側、ひだでうまく隠れている部分に、奇妙な縫い目があることも調べればわかることだろう。

つまり、証拠はその場にあるということだ。

壬氏が玉葉妃の前で無礼な真似をすとは思わないが、しないとも限らない。

覚悟を決めるしかなかった。

「私は何をすればよろしいのでしょうか？」

二人は顔を見合わせると、肯定の意味でとらえた。

どちらも、目がつぶれるほどの優しい笑みを浮かべる。

安らかな赤子の寝息が聞こえる中で、猫猫は消え去りそうな小さなため息をついた。

猫猫は翌日から、ほとんど何もない荷物をまとめなくてはならなかった。



小蘭シャオリンや同部屋のものは皆うらやましそうにしている。  
どうして、そうなったのか追及してくる。

猫猫は乾いた笑みを浮かべはぐらかすしかなかった。

猫猫は、皇帝の寵妃の侍女となった。

まあ、いわゆる出世である。

## 6 毒見役

部屋付の宮女、しかも帝の寵妃の侍女ともなれば、待遇は高くなる。今まで金字塔の底辺にいた官位は真ん中くらいまで上がっている。説明によると、給金も跳ね上がっているらしいが、その二割は売りとばした農民のもとに手数料として渡されるのでおもしろくなかった。

今までのたこ部屋でなく、狭いながら一室を与えられた。

菰を重ねて敷布をかけただけの布団から、寝台つきに階級が上がった。寝台二つ分の広さしかない部屋であるが、朝同僚の身体を踏まずに起きることができるのは正直うれしかった。

うれしい理由はもう一つあるのだが、これは後程語ることになる。

玉葉妃キョクキョウの住まう翡翠宮には、猫猫マオマオ以外に四人の侍女がついている。

公主が離乳食を取り始めたので、乳母を新たに雇うことはなかった。

梨花妃リフアが十人以上つけているのに比べると、随分数が少ない。

正直、最下層の小間使だったのがいきなり同僚になりましたといわれて侍女たちは難色を見せたのだが、猫猫が思うような嫌がらせはなかった。

むしろ、同情的な目で見られていた。

(なぜに?)

その理由はすぐにわかった。

薬膳をふんだんに使った宮廷料理が目の前にある。

玉葉妃の侍女頭である紅娘は、菜を一つずつ小皿に盛ると猫猫の前に置いた。ホニヤン

すまなそうに玉葉妃がこちらを見ているが、止める様子はない。

残り三人の侍女たちは、哀れな目でこちらを見ている。

毒見役というものである。

東宮のことで皆、神経質になっている。

公主が病になったのもどこからか毒が紛れ込んでいたのではないかという噂が回っていたからだ。毒の元を知らされていない侍女たちは、何に紛れ込んでいるかわからない毒を恐れていたに違いない。

そこで、毒見役専門に下女が送られてきたのなら、使い捨ての駒としてみてもおかしくない。

玉葉妃だけでなく、公主の離乳食、皇帝訪問の折の滋養料理も毒見のうちに含まれる。

玉葉妃の懐妊がわかった頃、二回ほど毒が盛られていることがあった。一人は軽いものですが、もう一人は神経をやられて手足が動けなくなっている。

今まで恐る恐る毒見役をやってきた侍女たちは、正直、感謝をしていることだろう。

猫猫は盛られた皿を見ると眉を寄せる。陶器製の皿だ。

(毒が怖いなら銀にするのは基本でしょうに)

箸でつまむとなますの具をじっくり見る。  
匂いを嗅ぐ。

舌の上にのせて、しびれがないのを確かめるとゆっくり嚥下した。

(正直、毒見に向かないのだが)

即効性の毒ならともかく、遅行性の毒であれば猫猫に毒見を頼んでも意味がないのである。

実験と称し、少しずつ毒に慣らした身体を作ってきた猫猫は、おそらく大抵の毒は効かなくなっていることだろう。

これは、薬屋の仕事としてではなく、猫猫の知的欲求を満たすための行為である。時代と場所が違えばきっとこう呼ばれていることだろう、『狂科学者』と。

薬師の技術を教えてくれたおやじのですら、呆れているほどだった。

身体の変化ではなく、自分の知識の中でそれらしい毒はないと確認すると、ようやく玉葉妃の食事が始まる。

次は、味気ない離乳食の番だった。

「皿は銀製のものに替えたほうがよろしいと思います」

感情をこめることなく上司の紅娘に伝えた。

一日目の活動報告として、紅娘の部屋ホンニヤンに呼び出されたのだ。部屋は広いが華美な装飾はなく、実用的な彼女の人柄を表しているようである。

三十路を前にした黒髪の美しい侍女頭は溜息をつく。

「ほんと、壬氏さまのいったとおりね」

呆れた顔で、わざと銀食器を使わなかったことを告白した。

壬氏の指示だった。

猫猫は無愛想な顔がさらに機嫌悪くなるのをこらえながら紅娘の話  
を聞く。

「あなたがどういう理由で、その知識を隠していたか知らないけど、  
まさに毒にも薬にもなる能力ね。字が書けることも言っていれば、  
お給金はもつともらえたはずだけど」

「薬屋の真似事を生業にしていたからです。かどわかされて連れて  
こられたのに、人さらいどもに今も給金の一部が送られていると考  
えると腸が煮えくり返ります」

「つまり、自分の給料が減ってでも、そいつらに酒代を与えてなる  
ものかということね」

賢い女官は猫猫の動機を理解してくれたらしい。

「無能なら二年の奉公でいくらでも替えがきくものだしね」

ついでに理解しなくていいところまで、察してくれた。

紅娘は卓子の上にある水差しを取ると、猫猫に持たせた。

「これは……」

猫猫がたずねる間もなく、彼女の手首に痛みが走った。衝撃で持たされた水差しが床に落ちる。陶器製のそれに大きなひびが入る。

「あらら、これって結構高いのよ。下女程度のお給金じゃあ、払えないくらいにね。これじゃあ、実家への仕送りもできないわね。むしろ請求するくらいじゃないと」

猫猫は紅娘がいわんとしていることがわかったらしく、無表情の中に皮肉めいた笑みを浮かべていた。

「もうしわけありません。毎月、仕送る分から差し引いてください。足りなければ、私の手持ちのほうからもお願いします」

「ええ、宮官長のところで手続きしておくから。それと」

紅娘は落ちた水差しを卓子の上に置き、引出から木筒を取り出した。さらさらと筆を滑らせる。

「これは、毒見役の追加給金の明細よ。危険手当というところね。気になる点があれば言ってちょうだい」

金額は、猫猫の現在の給料とほぼ同額だった。手数料でとられる分がないだけ、猫猫は得したことになる。

( 飴の使い方がうまいことで )

猫猫は深く頭を下げると部屋をあとにした。

## 7 媚薬

元々いた四人の侍女たちはたいへん働き者であった。

広さはそれほどないものの、翡翠宮はほぼ四人で回っている。尚寝、つまり部屋掃除専門の下女も来るのだが、寝所はもとより内部の掃除はすべて四人の侍女たちで終わらせる。

新参者の猫猫マオマオの仕事はご飯を食べることくらいしかないわけだ。

一番嫌な仕事を押し付けたことに罪悪感を持っているのか、それとも自分の領域を荒らされたくないのか、紅娘ホンニャン以外の侍女は誰も猫猫に仕事を押し付けることはなかった。むしろ、手伝おうとするのを「いいのよ」とやんわりと断って、部屋に押し込めていた。

（落ち着かない）

小部屋に押し込まれて、呼ばれるのは二回の食事と昼の茶会、そして数日に一度訪れる帝の滋養強壮料理を食べることくらいである。たまに、紅娘が気をきかせて用事を頼むのだがすぐに終わる簡単な仕事だけである。

（なにこれ、食っちゃ寝だろ）

毒見に加えて、食事も以前より豪華になった。茶会には甘い菓子があり、余れば猫猫にも配られる。

蟻のように働くことがなくなったので、栄養はそのまま肉になっていった。

（家畜にでもなった気分だ）

毒見役をやるにあたり、猫猫に不適な点はもう一つある。  
猫猫はもともとから痩せているので、毒にあたって痩せたとしてもわかりにくいからだ。  
それに致死量は体の大きさに比例する。太ればそれだけ生き残る可能性が高くなる。

猫猫としては痩せるほどの毒がわからないわけではなく、致死量をこえても生き残る自信があるのだが周りはそうでないらしい。

小柄でやせぎすな猫猫は幼く見えるらしい、可哀そうな使い捨ての駒に三人の侍女たちは同情していた。

お腹いっぱいでも粥はおかわりをつがれ、菜の具は他のものより一つ多い。

( 妓楼ねえちやんの小姐たちを思い出す )

無愛想で無口で可愛げのない生き物であるはずが、なぜか遊女たちに可愛がられていた。ことあるごとに、菓子を持たされ、飯を食わされた。

ちなみに猫猫は気づいていないようであるが、可愛がられる理由があった。

猫猫の左腕には無数の傷がある。

切り傷、刺し傷、火傷の痕に針のようなものが刺された痕。

小柄でやせぎすで腕には無数の傷。

よく腕から包帯が巻かれ、たまに青白い顔で往来で倒れることもあった。

無愛想で無口なのも彼女が今まで受けていた仕打ちの結果だと皆が涙を飲んだ。



皆、虐待を受けているものだと思っているようだが、真実は違う。

全部、猫猫本人がやったことだ。

傷薬や化膿止めの効能を調べ、毒を少しずつ飲み耐性をつけ、時に自分から毒蛇を噛ませることもあった。たまに量を間違えて、倒れることもあった。

ゆえに傷は利き腕でない左にのみ集中している。

別に痛みが好きという被虐的な趣味はかけらもないが、知的欲求が薬と毒物に傾きすぎている点でごく普通の娘とはかけ離れていた。

そんな娘を持つて迷惑きわまりないのがおやじどのである。

花街に暮らす自分の娘が遊女以外の道を進めるようにと、薬の知識と文字を教えたというのに、いつのまにいわれなき誹謗中傷を受けるようになった。

一部のものは理解していたが、多くのものはおやじどのに冷たい眼を向けていた。

年頃の娘が、実験と称し自傷行為を繰り返すなど思いもしない。

などというわけで、親に虐待された挙句、後宮に売りとばされ、使い捨ての毒見にさせられた哀れな娘と皆に思われている。

(このままでは豚になる)

そんなことを考えるようになった頃、猫猫の前に嫌な訪問者が現れるのであった。

人間離れした美貌を持つ青年は、天上人の笑みをたやさず浮かべていた。

三人の侍女は頬を染めながら客人を迎える茶を用意する。

壁の向こうから小競り合いが聞こえるところをみると、だれが準備するのか言い争っているらしい。

呆れた紅娘ホンニヤンは自ら茶器を用意すると、三人に部屋に戻るよう指示した。

毒見役の猫猫は銀の茶碗を持つと匂いを嗅いで口に含んだ。

さつきから壬氏ジンシンがずっとこっちを見ているので居たたまれない。視線を合わせないように目を細める。

若い娘であれば、たとえ宦官であろうともこれだけの美丈夫に見つめられて悪い気はしないはずだが猫猫はそうではない。興味が他人のそれよりもずれたところにあるため、壬氏が天女のように美しいと理解していても、一線を引いてみている。

「これは貰いものなんだが、味見してくれないか？」

籠のなかに、包子が入っており猫猫はつまんで中を割ってみる。餡にひき肉と野菜が詰まっている。匂いを嗅ぐとどこかで嗅いだことのある薬草の匂いがした。

「昨日食べた強壯剤と同じものだ。」

「催淫剤入りですね」

「食べなくてもわかるんだ」

「健康には害はありませんので、お持ち帰りください。美味しくいただいてください」

「いや、貰った相手を考えると素直に食べれないもんだろ」

「ええ、今晚あたり訪問があるかもしれませぬ」

淡々と述べる猫猫に、想像したものと当てが外れた壬氏はなんともいえない顔をしている。知っていて催淫剤入りの饅頭を食べさせようとしたのだ、毛虫を見るような目で見ないだけましなのである。ところでどんな相手からもらったものであろう。

二人のやり取りに、玉葉妃は鈴の鳴るような声で笑う。足元には寝息を立てる小鈴公主がいる。

猫猫は一礼すると客間をあとにしようとする。

「ちょっと、待った」

「なにか御用でしょうか？」

壬氏は玉葉妃と目を合わせ、二人は頷いている。どうやら、猫猫が来る前に本題は伝えられているようだ。

「媚薬を作ってくれないか？」

一瞬、猫猫の瞳に驚きと好奇の目が浮かんだ。

その薬をどう使うのかは知らないが、それを作る過程は猫猫にとつて至福の時に違いなかった。

唇が笑みを作るのを押さえつつ、猫猫はこう述べた。

「時間と材料と道具。それがあれば」

媚薬に準ずるものなら作れます、と。

## 8 葉棚

どうしたのか。

柳の眉に憂いをひそめ、腕を組んでいる。

性別さえ違えば傾国となるといわれた壬氏であるが、本人がその気であれば性別など意味がないものといえる。

今日もまた後宮の中級妃ひとり、下級妃ふたり、殿中でも武官と文官ひとりずつに声をかけられた。武官には強壯剤入りの点心までいたただいたので、今日は夜勤を行うことなく宮中の自室に戻っている。自衛のためであり、さぼりではない。

机の上にある巻物にさらさらと名前を書く。

今日声をかけてきた妃たちの名前である。帝の御通りがないからといって、違う男を寢所に引き入れようなど甚だしい。正式な報告ではないものの、今後、沙汰が下ることであろう。

自分の美貌が女官たちの試金石だということを籠の小鳥たちは幾人わかつているだろうか。

妃の位は、まず両親の家柄に加え、美しさ、賢さを基準に選ばれる。家柄、美貌に比べ、賢さというのは難しい。国母となるにふさわしい教養を持ち、それに加えた貞操観念も持ち合わせねばならない。

意地の悪い我が皇帝は、選出基準に壬氏シンシを使うことにした。

玉葉妃キョクヨウと梨花妃リフアを薦めたのも壬氏である。玉葉妃は思慮深く謙虚であらせられ、梨花妃は感情的な性格があるものの誰よりも上に立つ

にふさわしい気質を持っている。  
どちらも皇帝に対する忠誠を持ち、邪まな感情は見当たらなかった。  
梨花妃に至っては心酔の域に達していた。

吾主ながらひどいかたである。

自分に国に都合のよい妃を揃えさせ、子を産ませ、その能力がない  
とあらば切り捨てる。

今後、寵愛は玉葉妃に傾き続けるであろう。

幽鬼のようにやせ細った梨花妃の元に通ったのは、東宮が身まかれ  
たときが最後だった。

梨花妃以外にも必要のなくなった妃は幾人もいる。それらは、折を  
みて実家に帰され、また下賜される。

重ねられた書類を一枚引き抜いた。

位は正四品、中級妃にあたる。名を芙蓉フユウといった。

先日、異民族を撃退した勲功としてとある武官に下賜されること  
になった妃である。

「さてさて、上手くいくことでしょうか？」

己の頭の設計通りに事を運べば、問題はないはずである。

それには、無愛想な薬師どのの協力がいくらか占めている。

自分を欲情の相手としない人間は皆無ではないが、毛虫のごとく見  
られたのは初めてである。

本人は上手く隠したつもりだろうが、表情にうっすら浮かんだ侮蔑  
の目は隠しきれていない。

思わず笑いがこみ上げる。天上から落ちる甘露のような笑みに少しだけ底意地の悪さをまじえて。

別に被虐嗜好はないのだが、妙に面白かった。

「今後、どうなることやら」

壬氏は書類を硯の下に置くと、眠りにつくことにした。

夜中、訪問者が来ても問題ないように、施錠はしっかりとかけて。

万能薬という言葉はあるが、実際万能である薬は存在しない。

おやじどのの言葉に反感を持っていた頃が猫猫マオマオにもあった。

どんな病にも、どんな人間にも効く薬を作りたい。そんなわけで、他人が目を背けたくなる傷を作り、新しい薬を開発してきたのであるが万能である薬はいまのところ完成の目途はない。

大変気に食わないことであるが、壬氏の持ってきた話は猫猫の興味を持たせるに十分であった。

後宮に入ってからというものの、甘茶くらいしか作れなかったのだ。材料になる薬草は驚くくらい後宮内に生えていたのだが、道具もなく、大部屋で怪しげな行為もできずに我慢してきたのだ。

材料の調達にとでかけるが表向きの理由として洗濯籠を背負う。紅ホン娘ニヤンの計らいで、今後洗濯係は猫猫になろう。

洗濯ものを届けに来たふりをして、前もっていわれていた医務室に

入る。中には、以前狼狽えるしかなかったあの医者と、王氏によく  
ついている宦官がいた。

医師は薄いどじょうのようなひげを触れながら、値踏みするような  
目で猫猫を見る。

なぜこんな小娘が自分の領域を荒らすのだと言わんばかりだった。

（醜女うしめをあまりじろじろみないでくださいまし）

医者に比べて宦官は主に接するように丁寧な動きで猫猫を案内する。

三方を薬棚で囲い込まれた部屋に入れられたとき、猫猫は後宮にき  
て一番の笑みを浮かべていた。頬は赤く染まり、眼はうるみ、一文  
字だった唇が柔らかい弧を描いている。

宦官が驚いた表情で猫猫を見るが、そんなの関係なかった。

引出の見出しを眺め、珍しい薬を見つけるなり踊るような奇妙な動  
きをする。喜びがあふれ出て、頭の中で納まりきれなかった。

「なんかの呪いか、なにかか？」

小一時間そんなことを繰り返したところだった。

いつのまにか現れた王氏が奇異の目で猫猫を見ていた。

引出の端から順につかえそうな材料を集める。それぞれを薬包紙に  
包み、筆で名前を書く。まだ木簡が書物として使われる中で、ふん  
だんに紙を使うことは贅沢である。

どじょうひげの医師は、何者だとのぞいてくるので、宦官は戸を閉



めた。宦官の名前は高順ガオシュンというらしい。

引出が高いところにあるのは、高順がとってくれる。その上司はなにもしない、しないならどこかいけよ、と無表情の奥に猫猫は思う。

引出の一番上に、猫猫は見覚えのある名前をみつけて身を乗り出した。

高順に手渡されたそれをみると、なんともいえない表情をする。

何かの種子が手のひらにおさまっている。

「これだけじゃあ、足りない」

「ならば、用意すればいいだけのことだ」

無駄に笑顔を振りまいてみていただけの美丈夫は簡単に言うてくれる。

「西の、さらに西の南方にあるものですよ」

「交易品を探せば見つかるだろう」

壬氏は種子を一つつまむ。杏仁に似た形をしたそれは、独特の匂いを発していた。

「これはなんというんだ？」

青年の質問に猫猫は答える。

「可カカオ可カオ？です」

じ。



## 9 可可？（前書き）

玉露で酔っぱらう人たちがいた頃の話です。

## 9 可可？

「お前の腕が想像以上のものだということがわかった」

壬氏ジンシは呆れた声で猫猫にいった。

「私もここまでとは思いませんでした」

目の前の惨状になかば放心していた。

「ああ、そうだな」

いつもの無駄に輝いた笑みはない。  
ただただ疲れた顔をしている。

「どうしてこうなったんだ」

それは、数時間前にさかのぼる。

届けられた可可カカオ？は、種子のままではなく粉末になったものだった。  
他に材料として猫猫マオマオが頼んだものはすべて翡翠宮の台所に運び込まれている。

三人の侍女たちは野次馬根性で眺めていたが、紅娘ホンニヤンが注意するとそれぞれ元の持ち場に帰って行った。

牛乳、乳酪バター、砂糖、はちみつ、蒸留酒に乾燥した果実、匂い付けの

香草油。どれも栄養価の高い高級品であり、同時に強壯剤として利用されるものである。

猫猫は一度だけ可可<sup>カカオ</sup>を食べたことがあった。粉を練って砂糖を混ぜ固めたもの、巧克力<sup>チョコレート</sup>とくれた遊女は言った。

指先ほどのかけらだったが、食べるときつめの蒸留酒を飲み干した気分になった。妙に気持ちが明るくなった。

邪な客が売れっ子妓女の関心をかうために珍しい菓子だといって渡したものである。残念なことに、様子の違う猫猫を見て、妓女は怒り、やり手婆に出入り禁止を食らう羽目になったという。

その後、種子をいくつか手に入れることはあったが、それを薬として扱うことはなかった。

花街の薬屋にそんな高級品を求める客はいなかったのだ。

記憶の中の巧克力は油脂で固めたものだと残っている。薬や毒物の匂い、味を完璧に覚えている猫猫は、食材に関しても鮮明な記憶を持っている。

まだ暑い季節であり、乳酪でうまく固められるとは思えないので、果実を包み込むことにした。氷があれば完璧なのだが、さすがにそれは無理だろうと材料の中に入れなかった。

代わりに大きな素焼きの水瓶を用意する。水が半分ほどはつてある水の蒸発により内部は外気より幾分涼しく、ぎりぎり油脂が固まる温度だろう。

猫猫はかき混ぜたそれを匙ですくい、口に含む。

苦味と甘味と他に気持ちを高揚させる成分が舌を通じて感じる。

昔に比べて、酒にも毒にも強くなった猫猫は、以前ほど高揚した気分にならなかったが、それでも効き目が強いと感じられた。

（もう少し小さくつくったほうがいいかな）

果実をさらに半分に取り、褐色の液体に浸す。

皿にのせ、空中に浮かすように壺の中にしまう。

蓋をかぶせ、菰で隠すとあとは固まるのを待つだけである。

壬氏<sup>ジン</sup>が試作品を取りに来るのは夕刻のことで、それまでに固まっているだろう。

（少し余ったなあ）

褐色の液体はまだ残っている。材料はとても高級品だし、栄養価も高い。媚薬といっても、猫猫にはそれほど効くものでもないの、後で食べることにした。麵麩を立方体に切り、しみこませる。これならば、冷やす必要もなさそうだ。

蓋をし、棚に置く。

残った材料はまとめて自室に置き、洗い物をするために外の水場に向かった。

このとき、切り分けた麵麩も自室に運び込むべきだったが、頭の中からはずれていた。味見で少し高揚していたせいかもしれない。

まあ、後の祭りである。

その後、紅娘に用事を頼まれたり、ついでに外に生えている薬草を摘みにいったりしている間に事は起こっていた。

洗濯籠に薬草を抱えてほくほくしている中、真つ青な顔をした紅娘と、憂いを含んだ玉葉妃キョクヨウが待っていた。高順ガオシユンもいることから、壬氏も来ているのだろう。

額を押さえる紅娘が台所をさしているのをみて、猫猫は籠を高順に押し付け現場へと向かった。

呆れ顔の壬氏がこちらを見る。

仲良く抱き合うように眠る三人の侍女たちがいた。胸元ははだけ、裳はふくらはぎまでめくれていた。皆が皆、幸福そうな顔で頬は紅潮している。

事前とか事後とか、不遜な言葉が頭をよぎったが、考えないようにした。

むしろ考えたくなかった。

卓の上には、褐色の麵麩があった。

数は三つ足りなかった。

紅娘と高順と猫猫で侍女たちをそれぞれの部屋に寝かせると、疲れがどつときた。

居間では玉葉妃と壬氏が物珍しそうに巧克力麵麩チョコパンを眺めている。

「これが、例の媚薬なの？」

「いいえ、それはこちらのほうです」

猫猫は果実を包んだものを差し出した。親指の爪ほどの粒が三十ほど並んでいる。

「じゃあ、こっちは何なんだ？」

「私の夜食です」

言葉を間違ったらしく、明らかに周りが引いている。高順や紅娘も異物を見る目をしていた。

「酒や刺激物に慣れていると、効き目はそれほどありません」

実験に使った毒蛇を酒に漬けて飲んでいたので、猫猫は酒豪だった。酒は薬の一つだと猫猫には分類される。

しげしげと、麵麩をつまんでみる壬氏。

「では、私が食べても問題ないのかな」

『それはおやめください!!』

紅娘と高順の声が重なった。高順の声を初めて聞いた気がする。

壬氏は冗談だよ、と麵麩を皿に置いた。

たしかに、皇帝の寵妃の前で媚薬を口にするのは不遜であるが、それ以上に間違っても天女的美貌が頬を染めながら迫ってきたら誰しも理性のたがが外れかねないためであろう。

「今度、帝のために作ってもらおうかしら。まんねりを防ぐために



も

「いつもの強壯剤の三倍は効くと思いますけど」

「三倍……」

持続のほうかしら、と玉葉妃の小声は聞こえなかったことにする。さすがにきついらしい。

媚薬を蓋付きの容器に移し替え、王氏に渡す。

「効き目が強いので、一粒ずつを目安にお願いします。食べ過ぎると血が回り過ぎて、鼻血が出ると思いますので。また、意中の相手と二人きりのときに使用してください」

注意事項を終えると王氏は立ち上がる。

帰り支度をするため、高順と紅娘は部屋を出る。

玉葉妃も一礼すると、籠の中で眠る公主とともに部屋を後にした。

猫猫は麵麩の皿を片付けようとすると、後ろから甘い匂いがした。

「思った以上のものを作ってくれてありがとう」

甘いはちみつのような声が聞こえる。

髪をすくい上げられ、首になにか冷たいものが当たっていた。

振り返ると、片手を振りながら王氏が部屋を出ていく。

「なるほど」

皿に目を落とすと、麵麩の数が一つ足りない。

犯人の目安はついている。

「被害者がでなければいいけど」

他人事のように猫猫は呟いた。

夜はまだ長い。

## 10 幽霊騒動その壱

寵妃、玉葉ギョクヨウに仕える侍女が一人、桜花インファは、今日も誠心誠意をこめて仕事に従事していた。

先日、仕事中に居眠りをしてしまうという失態を犯したが、主である玉葉妃ギョクヨウは咎めもしなかった。ならば身を以って仕えるしかあるまいと、窓の棧から欄干の一本一本まで丁寧に掃除する。

台所の茶器を整理しようと思つて中に入ると、新人侍女がなにやら作っていた。名前を猫猫マコメコというが、滅多に自分から口を聞かないので、どんな人間なのかよくわからない。

ただ、腕に虐待を受けた痕があり、身売りされたこと、そして現在、毒見専門で雇い入れられたことを聞くといたたまれなくなった。

痩せた身体を太らせようと食事を増やしたり、傷痕をさらすのは可哀そうだと掃除をさせなかったり。残り二人の侍女も同じ考えらしく、結果、猫猫の仕事がほとんどなかった。

侍女頭の紅娘はそれではあんまりだと、洗濯を猫猫の仕事に与えた。洗濯は籠を運ぶだけなので、腕の傷は目立たない。他にもこまごまとした用を頼んでいるらしい。

「なにを作っているの?」

鍋で草のようなものをゆでている。

「風邪薬です」

必要最低限の言葉を述べるのみだ。きつと、虐待の後遺症でひととの付き合いがうまくいかないのかもしれないとおもつと涙を誘う。

薬に造詣が深いという話で、時折、こうやって作っている。片付けはきれいにしてくれるし、この間もらったあかぎれの薬は重宝しているので桜花は何もいうことはない。薬づくりは、たまに、紅娘からも頼まれてやっているようである。

銀の茶器を取り出すと乾いた布で丁寧に磨く。

猫猫が口を開くのはほとんどないが、旨い具合に相槌を打ってくれるので、話しがいがある。最近噂になっっている怪奇話をした。

中空を舞う、白い女の噂だった。

猫猫は、作り終えた風邪薬と洗濯籠を持ち、医局に向かう。

一応、形だけでも医師の判断を委ねるためだ。

(ここ一か月位の出来事か?)

ありきたりな怪奇話に猫猫は首を傾げる。

まだ、こちらに来る前には聞いたことのない噂だった。噂という噂は小蘭が持ってきてきてくれたので、ここ最近にできた話だとわかる。

後宮はぐるりと城壁に囲まれている。四方と中央の門以外出入りができず、堀の向こうには深い堀が通っており、脱走も侵入も不可能である。

深い堀の下には後宮から抜け出そうとした妃が今も沈んでいるなど  
言われている。

（城門付近かあ）

近くに建物はなく、松林が広がっていたはずだ。

（夏の終わりからだったよな）

この時期はあるものの収穫期である。

よからぬことを頭に浮かべていると、狙いすましたかのように嫌な  
声が聞こえた。

「お仕事ご苦労様」

牡丹のような絢爛な笑みに、猫猫は無表情をはりつけたままだった。

「いいえ、それほどではございません」

医局は中央門のそばにあり、後宮をつかさどる三部門もそこに居室  
を構えている。

壬氏ジミンはよくそこに現れる。

宦官ならば内侍省に在るべきだろうが、この男はどここの部屋にも所  
属せず、むしろすべてを監視するように眺めていた。

（宦官長たちよりも上の立場ねえ）

可能性としては現帝の後見人といったところであるが、二十歳そこ  
そこの青年がそれとは考えづらい。その子息であったとしても、わ

わざわざ宦官になる必要もない。  
玉葉妃と親しいことから、そちら側の後見人とも考えられるが、むしろ……。

（皇帝の御手付きか？）

御通りの際、玉葉妃との仲を見る限り正道ノイマルのようだが、人は見かけによらない。

いろいろ考えるのは面倒なのでとりあえず皇帝の愛人ということ片付けておこう。

「なんかものすごく失礼なこと考えてる顔に見えるんだけど」  
「気のせいではないですか」

一礼して振り返り、医務室に入るとどじょうひげのやぶ医者がかごりごりとすり鉢をすっていた。この医者の場合、薬を作るためでなく暇つぶしでやっているだけだと猫猫はわかっている。  
でなければ、毎回自分の作る薬を半分渡す必要はないだろう。

最初はわけのわからない小娘と思っていたらしいが、猫猫の作る薬をみて段々態度が軟化してきた。

いまでは、茶菓子をだし、必要な材料を分けてもらえるようになったのだが、医局としてそれはあまりよくないことである。  
守秘義務だとか、なんだとかあまりにないのである。

「薬を見てもらえませんか？」

「おお、嬢ちゃんかい。ちよいとまってるな」

茶菓子と雑茶を用意する。甘い饅頭の類ではなく煎餅である。  
辛党の猫猫にはうれしい。

最近、いろいろ餌付けされている気がしないでもないが。

やぶだが人は良い。性格はいいが、仕事はできない型タイプである。

「私の分もお願いするよ」

甘いたおやかな声がある。

後ろを振り返らなくても、なにやら輝かんばかりの空気が回りに立ち込める気がする。

やぶ医者は驚きと高揚を浮かべた顔で、せっかく用意した煎餅と雑茶を、白茶と月餅に替えて持ってきた。

（煎餅が……）

輝かしい笑顔が横に座っている。

身分差を理由に同席を拒否したが、無理やり肩を押さえこまれた。見た目の優しさと全く違う強引な行動に猫猫は辟易した。

「老師せんせい、すまないが、奥からこれを取ってきてくれないか？」

紙切れを渡す。

遠目からみても、かなりの数が書かれていた。しばらく時間が稼げよう。

やぶ医者は目を細めると、残念そうなまなざしで奥の間に入った。

（最初からそのつもりだったんだろうな）

「本題はなんでしょうか？」

察しのよい猫猫は、湯飲みを揺らしながら聞いた。

「幽霊騒ぎは知っているかい？」

「噂程度に」

「じゃあ、夢遊病ってのはわかるかい？」

猫猫の目の端に輝きが宿ったのを王氏は見逃さなかった。

くくくつと、天女の笑みに意地の悪さが混じる。

大きな手のひらが猫猫の頬を撫でる。

「それはどうやったら治るんだい？」

甘い甘い果実酒のような声でたずねた。



## 11 幽霊騒動その貳

「そんなものわかりません」

自分を卑下しないが、過剰にもとらえない猫猫マオマオの答えだった。

どんな病気が知っていたし、患者も見たことある。  
その結果いえるのはこのことだった。

「薬で治せるような病気ではありません」

気の病である。

妓楼の遊女がこの病にかかったとき、おやじどのはなんの処方もしなかった。

薬で治るものではなかったからだ。

「薬ではというと」

何なら治るんだ？と聞いていた。

「私の専門は薬です」

言い切ったつもりだが、横をちらりと見ると憂いを含んだ天上人の顔があった。

(目を合わせてはだめだ)

野生動物でも扱うかのごとく青年から視線をそらす。そらすそらす

せない。回り込んで猫猫のほうを向いていた。

かなり粘着質である。

「……努力します」

ものすごく嫌な顔をしながら答えていた。

夜半に迎えに来たのは、宦官の高順ガオシュンだった。

寡黙で無表情なところはとっつきにくそうに思えるが、猫猫はむしろそこに親近感が湧く。

(あまり宦官ばくない人だよな)

宦官は物理的に陽の気を取り払っているため、女性的になることが多い。

体毛が薄く、性格は丸く、性欲のかわりに食欲が増し太りやすくなる。

一番わかりやすいのは、やぶ医者例だ。

高順はというと、体毛は濃くないが、精悍で後宮という場所になければ武官と間違えられることだろう。

(どうしてこの道を選んだのだろう)

気になっても聞いてはいけないことくらいわかる。黙って頭を振った。

灯笼を片手に持ち、先導する。

月は半分の大きさだったが、雲がないだけ明るかった。昼間しか見たことのない宮内は、まるで別の場所のようだ。時折、がさがさと物音がしたり、なんだか喘ぎ声のようなものが木陰から聞こえたりしたが無視することにした。

まあ、宮中にはまともな男性は皇帝以外いないということ、恋愛の形など歪でもしかたないわけである。

「猫猫さま」

高順が話しかけてきた。

「敬称はいりません。高順さまのほうが位は高いでしょう」「では小猫シャオメウ」

（いきなり小付けちゅんですか）

案外軽いのか、このおにいさんとか思いながら、猫猫は頷いた。

「王氏ワンさまを毛虫でも見るような目で見るのはやめていただけませんか」

（やっぱり、ばれてるのか）

ここ最近、露骨に表情筋が反応して、鉄面皮では隠しきれないらしい。

首がとぶことは今のところないと思うが、節制せねばなるまい。お偉いさんにとって、虫けらは猫猫のほうである。

「今日も帰るなり、『なめくじでも見るような目をされた』と報告され」

(たしかに、粘着質でべたべた気持ち悪いとは思いました)

いちいち報告していることも粘着質だ。

「身を震わせながら、潤んだ瞳で微笑んでいらしてました。悦というのはあれを言うんですね」

誤解しか生まないような語彙を、至極真面目に答えてくださいました。

むしろ、虫けらから汚物に下がる勢いである。

「……、以後気を付けます」

「ええ、免疫のないものは、一目見るなり昏倒しかねないので、処理が大変なのです」

深いため息に苦勞がにじんでいる。

大変疲れるお話をしているうちに、東側の城門についた。

城壁は猫猫の四倍ほどの高さがある。外側は深い堀で、食糧や資材の運搬、時折、下女の入替わりの際に、橋が下ろされる。

後宮で脱走は極刑を意味する。

門には、常に衛兵が張り付いている。内側に宦官が二人、外側に武官が二人。門は二重になっており、詰所が外側と内側両方についている。

跳ね橋を下ろすも上げるも人力では足りないので、牛が二頭飼育されていた。

猫猫は近くに広がる松林にあるものを探しに行きたい衝動にかられたが、高順がいるからかなうわけもなく庭園の東屋に座った。

半月を背景にそれは現れた。

宙を舞う白い女の影。

長い衣とひれを纏い、踊るような足取りで城壁の上に立つ。

衣が揺らぎ、ひれが生き物のようにうねる。長い黒髪が、闇の中で照らされ、淡い輪郭を際立たせる。

「月下の芙蓉」

ふとそんな言葉が頭によぎる。

高順は一瞬驚いた顔を見ると、ぽつりとつぶやいた。

「勘がいいですね」

女の名は『芙蓉』、中級妃。

来月、功劳として下賜される姫である。

## 12 幽霊騒動その参

夢遊病というのは、よくわからない病気である。  
寝ているのにあたかも起きているような動きをする。

何が原因といえは、心の軋轢であり、薬草をいくら煎しても意味がない。

とある遊女がその病にかかった。

朗らかで詩歌の上手い女で、身請け話が持ち上がっていた。

しかし、その話は破談となる。

幽鬼にでもとりつかれたかのように、毎晩妓楼を散策しているのだ。  
歩き回る妓女をやり手婆が止めようとすると、爪で肉をえぐられた。

翌日、妓楼のものがみな不審な行動に詰め寄るが、妓女は朗らかな  
声でこう語るのだ。

「あら。みなさん、どうしたの？」

記憶のない彼女の素足には、泥と擦り傷がついていた。

「それでどうなった？」

居間には壬氏ジツシと猫猫マオマオ、高順ガウシユンの他に玉葉妃ギョクヨウヒもいた。公主は、紅娘ホンニヤンにまかせている。

「なにもありません。身請け話がなくなったら、徘徊はなくなりま

したので」

にべもなく猫猫は言う。

「つまり、身請け話が嫌だったってことかしら？」

「おそらく。相手は大店ですが妻子どころか、孫までいる身分でしたから。それに、あと一年も働けば、年季はあけたのですよ」

気に入らない相手に身請けされるなら、あと一年奉公を我慢したほうがいいらしい。結局、その遊女は新しく身請け話もなく年季があけたのだった。

「極端な気持ちの高ぶりがあったあとに徘徊が多いので、気持ちを落ち着かせる香や薬を配合したのですが、まあ、気休めにしかなりません」

「ふーん」

面白くなさそうに壬氏が頼杖をついている。

「本当にそれで終わり？」

ねっとりとした視線に対して、侮蔑の表情を浮かべるのを我慢する。隣では、無言で声援を送る高順がいる。

「それでは仕事に戻りますので失礼します」

一礼して部屋を出る。

少し時間をさかのぼる。

幽霊見学の翌日、猫猫が向かったのは東側のおしゃべり娘、小蘭シャオランの元だった。

小蘭は猫猫に会うなり、玉葉妃のことを根ほり葉ほり聞き出そうとしたので、さしあたりのない情報と交換に幽霊騒動について聞き出した。

幽霊騒動が起き始めたのは半月ほど前。最初は北側で見つかったらしい。

それからまもなく東側で見つかるようになり、毎晩見られたところと。

衛兵たちは怪談話に恐れをなして、なにもしない。

今のところ害があるわけでもないのに、誰も何も処置しようとしならしい。

まったく役立たずな警備である。

次に向かったのは、やぶ医者ヤブイシャの元へ。

個人情報なんて言葉がない時代に、守秘義務などわかっていない男は聞いていないことまで話してくれる。

最近、元気がない芙蓉フメイ姫のこと。

息を吐けば飛び去りそうな小さな属国の三番目で、姫という肩書でありながら上級妃にもなれないご身分。

北側の棟持ちで、舞踏が趣味だが小心者で緊張しやすく、皇帝の御目通りの際失敗している。



踊りを除けば、特に目立った容姿でもなく、入内から二年、いまだ御手付きもないらしい。

今度、下賜される先は、幼馴染の武官の元だということで、幸せになればいいということ。

(なあるほど)

猫猫は、頭の中でなにかが組みあがった。

しかし、推測の域を出ないそれをいうのはどうであろうか。

(おやじが推測でものを話すなっていったから)

だから話さないことにした。

大人しい色白の姫は、頬を染めて中央門をくぐる。目立った風貌ではないものの、幸せを感じた明るい頬に皆が嘆息した。

下賜されるならこうでありたい。

その光景が広がっていた。

「私にくらい話してもいいんじゃないかしら？」

艶やかな笑みを浮かべる玉葉妃、一児の母であるが実年齢は二十に満たない。少しお転婆な笑みが浮かんでいた。

猫猫は一瞬、考え込んだ。

「あくまで推測ですので。あと、気分を害されなければ」

「自分で聞いておいて、腹は立てませんよ」

「他言無用であれば」

「口は堅くつてよ」

猫猫は、妓楼の夢遊病者の話をした。

先日、壬氏たちの前でしたものと別の、もう一人の夢遊病者の話だ。

前の遊女と同じく、身請け話が持ち上がったところで病になり、そして破談になった。

しかし、その後も夢遊病は止まらず、前回と同じように薬を処方しても気休めにもならなかった。

そんな遊女に新たに身請け話が持ち上がる。楼主は、病気ものを身請けさせるには忍びないといったが、それでも身請けしたいということだった。しかたなく、前の身請け話の半分の銀で契約は成立した。

「後程わかったのですが、これは詐欺だったのです」

「詐欺？」

先に身請け話をした男は、あとから身請け話をした男の知り合いだった。遊女が病のふりをするかわかっていて、破談にする。そして、本命の男が半額で身請けする。

「遊女はまだ年季が残っており、男は身請けする銀が足りなかった」「つまり、この遊女たちと芙蓉姫は同じだったこと？」

幼馴染の武官は、属国とはいえ一国の姫に求婚できる身分ではない。武勲を立てていつの日か姫を迎えに行くつもりだった。

しかし、姫は政略により後宮に入ることになる。武官を思っていた姫は、得意の舞踏を失敗して皇帝の気を引かないようにしていた。案の定、二年間夜伽はなく身はきれいなままである。

武勲を集め、次の勲功で芙蓉姫が下賜されるとなったころ、姫は怪しげな徘徊をするようになる。

間違っても、皇帝が芙蓉姫を惜しいと思わないように、御手付きにならないように。

御手付きになれば、下賜されるのは後になる。また、処女性を重んじる芙蓉姫にとって、夜伽を行った時点で幼馴染に顔向けできないだろう。

東門で踊っていたのは、戻ってくる幼馴染の祈願のため。怪我をせぬように祈るため。

「あくまで推測です」

「なんていうか、帝については、なきにしもあらずなので何も言えないわ」

寵妃は少し困った顔をしている。

「芙蓉姫がうらやましいなんて言ったら、私はひどい女かしら」

「そんなことないと思います」

つじつまは大体あっていると思うが、壬氏に話す気はない。  
そのほうが幸せに違いないから。

あの柔らかい素朴な笑みをそのままにしたかった。

問題はすべて解決したかに見えたが……。

実はひとつだけ謎は残っていたのである。

「どうやって上ったんだろう?」

猫猫は自分の四倍もある壁を見上げると、首を傾げるのだった。

### 13 恫喝（前書き）

暴力表現があります。

### 13 恫喝

がしゃん、と何かが落ちる音がする。

芋と雑穀を煮た粥と茶、すりおろした果実がばらまかれる。

「こんな、下賤の食べ物リフマを梨花さまに食べさせる気？作り直してもらいなさい」

派手な化粧をした若い女官は、まなじりを上げていた。梨花妃にく侍女の一人である。

(あーあ、面倒くさい)

ため息をまじえながら皿を拾い、こぼれた食事を片付ける。

マオマオ猫猫がいるのは、水晶宮。

梨花妃の居住である。

周りにはにらみつけるような視線がいくつも。

あざ笑うかのような目、さげすむような目、敵意をあらわにする目。

キョクキョウ玉葉妃キョクキョウに仕える猫猫にとっては敵地も同然、針のむしるだった。

皇帝が玉葉妃の元に現れたのは、昨晚のこと。

いつもどおり、毒見を行い、部屋をあとにしよつとしたとき。

「噂の薬師どのに頼みたいことがある」

初めて声をかけられた。

（噂ってなんなんだよ）

皇帝は偉丈夫で美髭をたくわえているが、年齢はまだ三十半ばくらいだ。これで国の最高権力を持っているのだから、後宮の女たちが目をぎらつかせるのは無理もないが、いかんせん猫猫である。「長い髭だな、さわってみたい」くらいにしかな思っていない。

「なんでございましょうか？」

恭しく頭を下げる。下女の身分としては、下手な対応を取る前に退室したいところである。

「梨花妃の容体が悪い。しばらく見てくれないか」

とのことだった。

帝の言は、天上の言。

首と胸はまだ仲良くしていたい猫猫としては「御意」と答えるしかなかった。

『見てくれ』ということは、『治せ』と同義である。

寵愛がなくなつたとはいえ、いくらか愛着が残っているのか、それとも、有力者の娘をないがしろにできないのかどちらでもよい。治さなければ、首がとびかねない。

一蓮托生である。

(それにしても、他の妃の前でいう話でもないのに)

猫猫にそんな依頼をしておき、悠々と夜食を食べ、玉葉妃と仲睦まじきことをおこなった帝は、やはり帝といういきものなのだとつくづく思う。

梨花妃を見るにあたってまずはじめたのが、食生活の改善だった。

現在、毒おしろいは王氏の言により、後宮内では使用不可となっている。卸した業者があれば、ひどく罰するよう徹底した。

ならば、身体に残った毒を排出することが先決だ。

食事は白がゆが盛ってあるものの、魚の素揚げのあんかけに、豚の角煮、紅白の饅頭に、ふかひれや蟹といった豪華な料理である。栄養はあるが、胃腸の衰えた病人に食べさせるには重すぎる。

よだれがでるのも押さえつつ、料理人に作り直しを命じる。勅命ということで、しがない下女風情の猫猫にもそれなりの権限が持たされていた。

繊維質の豊富な粥に、利尿作用のある茶、消化のよい果実。

残念なことに、先ほど床にぶちまけられた。

勅命云々よりも、玉葉妃に仕えていた容貌悪しき下女が気に入らなかつたのだろう。

言いたいことはたくさんあるが、ぐっところえて片付ける。



新たに侍女が絢爛豪華な食事を持ち、梨花妃のもとへ運び入れられたが、しばらくするとほとんど手も付けられずもどることとなる。残りは端女たちのご褒美となることだろう。

触診を行いたいところだが、天蓋付の寝台のまわりには侍女がまわりつき、恭しくもまったくない看病を行っている。寝ているところにおしるいははたけば、咳のひとつもでるものなのに、

「空気が悪い。下賤のものがいるからだ」

と、部屋を追い出されてしまった。手のだしようがない。

（あのままでは、衰弱死は確実だな）

毒がたまり過ぎて排出が間に合わないのか、それとも気力が足りないのか。

部屋の前の壁に寄りかかり、自分の首がはなれるまで何日かと指を折っていると、周りから嬌声が聞こえた。

ものすごく嫌な感覚がして、ものすごく重々しく顔を上げると、ものすごく綺麗な顔がすこぶる陽気に笑っていた。

「なにかお困りのようですね」

「そのように見えますか」

棒読みの半眼で答える。

「そのように見えますが」

じっくりと見つめてくるので次第に視線がそれる。それを追うように長いまつげが近づいてくる。

目が合えば、条件反射で汚物を見るように接してしまうだろう。

「なんなの、あの女」

ぼそりと毒気づく声が聞こえる。食事を下げた下女だ。

ものすごく居たたまれない。周りから恐ろしい空気が漂ってくる。

耳元で甘い蜜の音がする。

「とりあえず中に入ろうか」

頷く前に部屋に押し込められた。

入ったところで、部屋には取り巻きたちが先ほどよりも険しい顔でにらんでくれる。

しかし、隣にいる天女の様相を眺めると、取り繕ったかのように淡い笑みを浮かべた。

女とは本当に恐ろしい。

「帝のはからいを無碍にするのは、美しき才女たちに似合いませんよ」

壬<sup>ツ</sup>氏の言葉に唇を噛みつつ、そっと寝台の前から退いた。

「ほれ、いけ」

背中を押され、猫猫はつんのめる。

一礼をし寝台の前に立つと、血管の浮いた色味のない手をとった。薬ほどではないが、医のつく類はそれなりに経験がある。

梨花妃は目を瞑ったまま、抵抗もしない。眠っているのか、起きているのかもわからない。魂の半分はすでにあの世に流れたようだ。

瞼の奥を見るべく、顔に指をかける。

さらりとした感覚が指を滑った。

以前と変わらぬ、真っ白な肌だった。

(前と同じ肌色?)

猫猫の表情が強張り、侍女たちのほうを向く。

その中のひとりの前に立つと、低い、押し殺すかのような声できいた。

「妃の化粧をしているのは、おまえか」

「ええ、そうよ。侍女たる勤めですもの」

食い入る猫猫にどこかおびえながら答える侍女。精いっぱい虚勢を張る。

「梨花さまには常に美しくあってほしいもの」

自分が正しいのだといわんばかりに。

「そうか」

ばちん、と大きな音が響く。

侍女はなにが起きたのか理解できないまま、力の向かう側に倒れこんだ。

頬と耳が異様に熱い。

「なにすんのよ!」

呆気にとられた周りの中で、一人が猫猫に食ってかかる。

「ああ? 莫迦に折檻するだけだよ」

人を食った言い方で倒れた侍女の髪をわしづかみにし、引きずる。

化粧台の前で止まると空いた手で、彫り物の器を手にする。

蓋を開けると、中のものを侍女にまぶした。

げげげほと咳をする。目には涙が浮かんでいた。

「よかったなあ、これで妃と同じくきれいになれるぞ」

髪をひっぱりあげ、獲物を狩る獣の笑みを浮かべる。

「毛穴から、口から、鼻から毒の気が全身にまわるからな。お慕いする梨花さまと同じ、枯れ枝のような手と落ちこんだ眼窩と血の気の失せた肌が手に入るぞ」

「そ、そんな……」

「なんで、禁止されたかわかってんのか、毒だっつってんだろ!!」  
「だっ、だつて。一番きれいだから。梨花さまも喜ぶと思って」  
「誰が自分の餓鬼殺した毒を喜ぶんだよ」

子どものような言い訳に、猫猫は舌打ちを鳴らすと髪の毛をなした。指には長い髪が数本巻き付いている。

「さっさと、口ゆすいでこい。顔も洗ってこい」

そそくさと部屋を出る女官を見送ると、今度は怯える他の侍女たちをみた。

「おい、このままだと、病人にさわるだろ。さっさと掃除しろ」

自分が散らかしたことを棚に上げ、粉だらけの床を指した。  
侍女たちはびくと身体を震わせると、掃除道具を取りに行った。

腕組みをし、ふんと鼻を鳴らす。

「女とは本当に恐ろしい」

両手を袖の中に入れ、ぼつりとつぶやく王氏。  
存在すら忘れていた。

「あっ」

猫猫は急激に頭から血が降りていくのを感じると、その場で蹲った。

### 13 恫喝（後書き）

育ちが悪いので、こちらが素のしゃべりです。

## 14 看病

梨花妃<sup>リファ</sup>の容体は思った以上に悪かった。

雑穀の粥を重湯に作り直したが、匙から吸う気配はなく、口をこじ開けて流し込むとゆっくり嚥下させた。

部屋の換気を行うと、むせるような香が薄れ、かわりに病人特有の匂いがする。

体臭をごまかすために香をたきしめていたのだろう、風呂に何日も入っていないようだ。無能な侍女たちに憤りが増す。

湯桶と布を準備させ、呼びつけた侍女たちとともに身体を拭く。侍女たちは難色を見せたが、猫猫<sup>マオマオ</sup>が睨み付けると大人しくしたがった。

肌は乾燥し、水をはじめ、唇は痛々しげに割れていた。紅の代わりにはちみつを唇に塗り、髪は簡単に結わえる。

あとはことあるごとに茶を飲ませる。時折、茶の代わりに羹<sup>あじもの</sup>を薄めて与える。

小用の回数が増える。

怪しげな新参者に敵意を示すかと思ったが、人形のような梨花妃は概ね大人しく世話を受けていた。うつろな目は誰か誰かを認識しているのかわからなかった。

一度に食べる重湯の量が茶碗半分から一杯に増えると、少しずつ中の米粒の量を増やしていく。顎を押さえずとも自分で嚥下するようになる、肉の旨味をとじこめた汁物とすりおろした果実を加えた。

小用も手伝いなしにできるようになる頃、ふと梨花妃の唇が動いた。

「……………して、……………のか」

漏れ出る言葉を聞き取るため、梨花妃のそばに立つ。

「どうして、あのまま死なせてくれないのか」

小さな消え入りそうな声だった。

猫猫は眉をひそめる。

「ならば、食事をとらねばいいことです。粥を食むという事は、死にたくないからでしょう」

と、温めた茶を梨花妃の口に含ませた。

こくと喉が鳴ると、

「そつか……………」

かすれた笑いがこぼれた。

猫猫に対する侍女たちの反応は、二つに分かれた。

猫猫を怖がるものと、怖がりながらも反発するものだ。

(やりすぎたか)



どうにも、感情の沸点をこえると過激な反応になってしまつ、悪い癖だと思つた。

無愛想だが概ね温厚でおっている猫猫としては、遠巻きに鬼か妖怪かを見る目つきでみられると地味に傷つくわけである。

今回の場合、梨花妃の看病に必要なだということ、仕方ないとした。

帝だか、玉葉妃<sup>キョクノユウ</sup>の命だかなにか知らないが、きらきらしい壬氏<sup>ジン</sup>どのがちよくちよくあらわれてくれた。使えるものは何でも使う勢いで、水晶宮に突貫工事で風呂場を作らせた。元々あつた湯殿に加えて、蒸気風呂<sup>サウナ</sup>ができた。

用がないのもう来るな、と猫猫なりに婉曲に伝えるのだが、壬氏は化け物のごとく扱われる猫猫をことあることに笑にくるのだつた。

暇人すぎる宦官である。

毎度、菓子折りを持つてきてくれる高順<sup>ガオシユン</sup>を見習っていたきたい。ああいうまめなのがいい旦那になれるだろう、宦官であるが。

繊維質を取り、水分を取り、汗をかき、排せつを促す。

身体から毒を排出することだけを考えて二か月が過ぎると、梨花妃は自分で散歩に出かけるまでになった。

以前の豊満な肉体はまだ取り戻すのに時間がかかるが、頬に赤みがさし、もう死の淵をさまようことはないだろう。

翡翠宮に戻る前夜、挨拶をしに梨花妃のもとに向かう。

意識がはつきりしてきたら、下賤のものなどと罵られることを予想していたが、そうでもなかった。

自尊心はあるが高慢ではない。東宮のあれこれで、嫌なお嬢様を想像していたのだが、実際は妃にふさわしい人格を持っていたようだ。

「それでは、早朝に辞させていただきます」

今後の食事療法、いくつかの注意点を伝えて部屋をでようとする

「ねえ、私はもう子は生せないのかしら」

何の抑揚もない声だった。

「わかりません。試してみればよろしいかと」

「帝の寵愛は潰えたのに？」

彼女のいわんとすることはわからなくもなかった。

元々、東宮を身ごもったのは、寵妃である玉葉妃のつなぎで夜伽をしていたからだ。

公主と東宮が三か月違いで生まれているのは、それを如実に語っていた。

「私がここに来るように命じたのは主上のご意思にございます。私  
が戻る以上、帝も梨花さまのもとにいらっしゃられるのではないかと」

それが政治的であれ、感情的であれ問題はない。

やることは一緒だ。

「玉葉妃の言葉も聞かず、みすみすが子を殺した女が、彼女に勝てるのかしら？」

「勝てる勝てないの問題ではないと思います。それに、間違えは学習すればいいのです」

猫猫は壁に飾られた一輪挿しを取る。星形の花を咲かせた桔梗が飾つてあった。

「世には百、千の花がありますが、牡丹と菖蒲のどちらが美しいというのは、決めつけるものではないと思います」

「私には胡姫の翡翠の瞳も淡い髪もなくてよ」

「他のものがあれば問題ないかと」

と、猫猫は視線を梨花妃の顔から下に移動させた。

普通、痩せる部分はそのからだといわれているが、ちゃんと哈密瓜メロンが二つくっついていた。

「それだけの大きさはもとより、はり、形は至宝かと」

妓楼で目の肥えた猫猫がいうのだ、間違いない。

玉葉妃に仕える身としては、あまり肩入れするわけにはいかなかったが、最後に手土産をひとつ置いておくことにした。

「ちょっと、耳を貸していただけですか」

「ごによごによと周りに聞こえない声で、梨花妃にあることを教えた。

遊郭の小姐たちが、「覚えていて損はない」といった秘術である。

林檎のように真っ赤な顔をした梨花妃が何を聞いたのか、侍女たちのあいだでしばらく話題になったという。

その後、翡翠宮にて、帝の御通りが一時極端に減ったことがあった。

「ふう、睡眠不足から解放されるわ」

と、玉葉妃が言ったのに猫猫が目を泳がせたのはまた別の話である。

## 15 炎

( やっぱりあった )

洗濯籠片手に喜色を浮かべる。

東門のそばの松林、生えているのは赤松だ。

後宮内は概ね庭園の管理は行き届いている。松林も年に一度枯葉や枯れ枝を取り除かれており、それはとある茸の生育を促すのである。

手に持ったのは笠の広がりも少ない松茸であった。

匂いが嫌いという人間もいるが、猫猫<sup>マオマオ</sup>は好物であり、四つに裂いて網で焼いて塩と柑橘を絞って食べるのは至福のときだ。

小さな林だが、都合よく群生を見つけたので籠の中には五本の松茸が入っている。

( おっちゃんところで食べようか、それとも台所で食べようか )

翡翠宮で食べるとなると、食材の出所を聞かれるかもしれない。林でとりましたとか、ちよいと女官としてはあっちはいけないことかもしれない。

なので、人は良いが仕事が駄目なお人よし医官のもとに向かう。好きだったらそれでよし、嫌いでも見逃してくれるだろう。

途中、小蘭<sup>シヤオラン</sup>のところによるのも忘れない。ともだちの少ない猫猫に

は貴重な情報源である。

梨花妃<sup>リファ</sup>の看病で肉の削げ落ちた猫猫は、戻るなり先輩侍女たちに太らされることとなった。相對する妃のもとに二か月もいたというのに、その反応は嬉しい一面、困るものであり、籠には茶会のたびに貰う月餅<sup>ビスケット</sup>や干を持って余していた。

甘いものはいくらでも入る小蘭は目を輝かせ、短い休憩の間ずっと猫猫と話してくれた。

あいかわらず、怪しげな怪談めいた話が多かったが、

「宮中の女官が媚薬を使って女嫌いの堅物武官を落としたのよ」なる話を聞いてなんだか冷や汗をかいた。

（うん、たぶん関係ないはず。たぶん）

そういえば、誰に使うのかまったく聞いていなかった気がする。

宮中とは、ここ以外の宮廷内のことをいう。

まともな男性がいる分、競争率の高い花形職業である。

ちなみにここは、まともな男性がない分、さみしい職場ということである。

医局には、どじょうひげのおっさんの他に、青白い顔をした見慣れ

ない宦官がいた。  
なにかしきりに手をさすっている。

「おお、嬢ちゃん、ちょうどよかった」

「なんですか」

「手がかぶれたらしくてね。すぐ、軟膏を作ってくれないかい？」

どうにも後宮の医を統べるものの言葉ではないのである。  
まあ、いつものことなので、隣の薬棚のある部屋へ向かう。

そのまえに、籠を置いて、松茸をとりだす。

「炭とありますか？」

「おおつ、立派なもんとつてきたな。醬ひしと塩おもあつたほうがいいな」

好物なのか話が早い。浮かれた足取りで食堂のほうへ調味料をもらいに行く。

可哀そうに病人は置いてかれたままだ。

（嫌いじゃなければ、一本くらいあげよう）

材料をごりごりとかき混ぜて猫猫は思った。

やぶ医者<sup>やぶ</sup>が調味料と炭鉢と網を持ってきたころ、ねっとりとした軟膏が出来上がる。

宦官の右手を取り、赤い発疹に丁寧に塗りつける。多少においがきついが我慢してもらわなくては。

薬を塗り終えると、少しだけ青白い顔がもどったようである。

「いやあ、優しい下女だねえ」

「そうだろう、よく手伝ってくれるんだ」

のほほんとした会話をする宦官二人。

宦官といえば、時代によつては権力欲にまみれた悪人のごとく扱われるが、実際はほんの一握りである。大抵は、このように穏やかな性格をしている。

(例外もありますが)

ちらりと不愉快な顔が浮かんだので、消去する。

炭に火をつけ、網を置き、手でさいた松茸を置く。また勝手に果樹園から失敬した酢橘を切る。

独特の香りが鼻にかかり、少し焦げ目がついたところで皿に盛り、塩と酢橘をかけていただいた。

二人のおっさんとともに、口に入っているのが共犯者決定である。

猫猫がもぐもぐと口を動かしている中、やぶ医者のはんきに世間話をしている。

「嬢ちゃんはなんでもできるから助かっているんだよ。軟膏以外にもいろんな薬を作ってくれるんでね」

「ほお、そりゃあ結構だね」

まるで実の娘に接するようなのでいささか困ってしまう。

ふと、もう半年以上も会っていないおやしさんを思い出した。



ほんの少し感慨にふけっていると、やぶ医者は実にやぶ医者らしい失言をしてくれた。

「ああ、作れない薬はないんじゃないのかね」

（はあ？）

誇大広告はよしてくださいという前に、目の前の宦官は反応していた。

「なんでもかい？」

「なんでもさ」

ふふんと鼻を鳴らすやぶ医者、ああ、やぶ医者たる所以である。

「じゃあ、呪いを解く薬も作れるのかい？」

男はかぶれた右手をなでながら言った。

気色はさきほどの青白い顔に戻っていた。

一昨日の晩のこと。

仕事はいつもごみの片づけで終わる。

後宮のあちこちから出たごみは、荷車に集められ、西側で焼却される。

本来は夕方以降に火を放つのは禁止されているのだが、風もなく、空気も湿っているので問題ないと許可をだした。

下官たちが穴の中にごみを投げる。

仕事を早く終わらせたかったので、自分も同じように作業に徹する。

ふと、荷車の中に目につくものがあった。

女物の衣だ。

絹ではないが、上質のもの。捨てるにはもったいない。

どうしたものかと持ち上げてみれば、中にはばらばらの木簡が包まれていた。

包んでいた衣は袖口が大きく焼け焦げている。

いったいどういうことだ。

はてと頭を抱えたとして仕事は終わらない。

木簡をひとつひとつ拾い上げ、穴の中の火にくべた。

「すると、炎が勢いよく吹き上げて不気味な色にかわったと  
「ああ」

小父さんは思い出すのも恐ろしい様子で肩を震わせる。

「その色は、赤や紫や青？」  
「そつだよ」

猫猫はなるほど頷いた。

今日聞いた小蘭の噂の元はここからだというのか。

(西側の話なのに、ここまでまわるのか)

女官の噂は韋駄天よりも早いというのは本当だろう。

「ありやあ、昔火事で死んだ妃の呪いだ。やっぱり夜に火をつけるのがいけなかったんだ。だから、こんな手になっちまったんだ」

宦官の手のかぶれは、炎を見たあとにできたらしい。

「なあ、娘さん。呪いを解く薬を作ってくれよ」

「そんな薬あるわけないですよ」

冷たく言い放ち席を立つと、隣の薬棚を「ごそごそ」といじりだした。

おろおろとするやぶ医者と小父さんを後目に、何かを卓の上に置いた。粉のようなものがいくつつか、あとは木簡の端切れだった。

「こんな色じゃありませんでした？その炎って」

木簡に炭をつけ、火が灯ったことを確認すると、薬匙で白い粉をとり火に入れた。

橙色の炎が赤く変わる。

「でなければ、こちら」

違う粉をいれると、青緑色に変わった。

「それでも、できますね」

松茸につける塩をひとつまみ入れると、黄色に変わる。

「嬢ちゃん、これは一体？」

驚いた様子でやぶ医者がきいた。

「色つきの花火と同じです。燃えるものによって、色が変わるだけです」

楼閣の客に花火職人がいたのだ。門外不出の秘伝の技も、閨わがやの中では世間話に変わる。隣に子どもが寝起きをしていることも知らないで。

「じゃあ、この手はなんなんだ？呪いじゃないのか？」

猫猫は白い粉を差し出した。

「これを素手で触ると、発疹ができることがあります。もしかして、肌が弱いのではないのですか？」

「……そうなのか」

骨がなくなつたように、力なく座り込んだ。小父さんの顔には安堵と驚きが張り付いている。

木簡に付着していたのだろう、それを燃やすことで色とりどりの炎が生まれた。

ただそれだけだった。

（なんでまた、そんなのがってことだけど）

猫猫の考えは遮られた。

ぱちぱちと手を叩く音が聞こえた。

「お見事」

いつものまに、嫌なお客が立っていた。

変わらないの天上の笑みを浮かべて。

## 15 炎（後書き）

主人公は完全に理系です。

王氏ジンに連れられて来たのは、宮官長の部屋だった。

中年の女官は、王氏の指示で退出した。

正直、申し上げましょう。この生き物と同部屋二人きりなど、まったくもって無理なのです。

猫猫マオマオとて、きれいなものは嫌いではない。

ただ、あまりにきれいすぎるとほんの少しの汚点が罪悪のように感じられて許せないのである。磨き抜かれた玉にほんの一筋の傷が入るだけで、価値が半分になると同じである。

ゆえに、つい地面を這いずり回る虫を見るように接してしまうのだ。

(鑑賞物として接したい)

小市民猫猫の本音である。

女官と入れ替わるように高順ガオシュンが入ってきたときは、ほっとした。最近、無口な従者が癒し系に変わりつつある。

「これらは一体何色くらいあるんだ？」

医局から持ち出した粉を並べる。

「赤、黄色、青、紫、緑、細かくわければもっとあります。具体的な数はわかりません」

「では、木簡にその色を付けるにはどうすればいい？」

粉のまま擦り付けるのは無理がある。いくらなんでも怪しかろう。

「塩ならば塩水につければいいだけです。こちらと同じようにいけると思います」

白い粉をよせる。

「他のものは、水以外のもので解けるものがあるみたいです。これも、専門外なのでわかりません」

「十分だ」

青年は腕を組んで、思考にふける。

それだけで一枚の絵になるようである。

壬氏が後宮内のいろんなことを掌握していることはわかっている。今の猫猫の言葉がなにかの根拠になったのだらう、頭の中ではばらになった欠片を組み合わせているようである。

(暗号……かな?)

導き出される答えはおそらく同じものだろう。しかし、それを言うべきではないと猫猫は重々承知していた。

雉も鳴かずに撃たれまい、である。

これ以上、用はなさそうなので、退出しようとするよ、

「待て」



呼び止められた。

「なんででしょうか？」

「土瓶蒸しが好きだ」

何の？というまでもない。

（やっぱばれてるか）

肩を落として、

「明日にでも探してまいります」

と伝えた。

ぱたんと、扉が閉じたのを確認すると、壬氏は甘いはちみつの笑顔をしまった。かわりに水晶の切っ先のような視線になる。

「ここ最近で、腕にやけどを負ったものを探せ。とりあえず部屋付以上、それにつく侍女も調べておけ」

「御意」

高順が退出すると、宮官長が入ってきた。

「申し訳ないね。いつも場所を借りてしまって」

「そ、そんなことは」

年甲斐もなく顔を赤らめている。

壬氏の表情には、また天上の甘露の笑みがはりついていた。

女とはこうあるべきなのに。

ほんのひと時だけ、唇を尖らせると、またもとの笑みを浮かべて、部屋を出た。

「はい、これ着てみて」

先輩侍女である桜花<sup>インファ</sup>は猫猫に真新しい衣を差し出していた。

色は生成りの上着に、薄赤の裳、袖は薄黄色でいつもよりも大きく広がっている。

絹ではないが、上等の綿でできていた。

「なんですか、これ？」

色は下女にふさわしい地味なものだが、意匠<sup>デザイン</sup>は実用には向かない。それに、胸元の大きく開いた服など、猫猫は着たことがないので、明らかに嫌な表情が浮かんでいる。

「何って、園遊会の衣装だけど」

「園遊会？」

先輩侍女たちの好意に完全に甘えていた猫猫は、毎日毒見と薬作り以外は、外を駆け回り薬草採ったり、小蘭<sup>シャオラン</sup>とおしゃべりしたり、医局で茶をいただいたりしていた。ゆえに、上流階級の話はほとんど耳に入らなかった。

首を傾げる猫猫に呆れた顔で桜花が教えてくれる。

年に二度、宮廷の庭園で社交界が開かれること。後のいない皇帝は、正一品の妃を連れてくること。妃の世話をする女官もついていくこと。

後宮内では、玉葉妃が『貴妃』、梨花妃が『賢妃』を冠している。他に二人、『徳妃』と『淑妃』を合わせて四夫人、それらが正一品となる。

本来、冬の園遊会は『徳妃』と『淑妃』のみ出席のはずである。だが前回、赤子を生んだばかりの玉葉妃と梨花妃は欠席したため、今回全員参加のこととなった。

「全員参加、ですか」

「ええ、心してかからないと」

桜花の鼻息が荒くなるわけである。

ただでさえ、後宮の外にでる滅多にない機会であるうえ、鈴麗公主のお披露目、上級妃の揃い踏みと行事満載なのだ。

侍女の数が少ない玉葉妃のため、慣れないことを理由にして猫猫が辞するわけにはいかない。そういう公の場所こそ、毒見役が重要視されることくらいわかっている。

（血の雨が降りかねない）

猫猫の勘は当たる。

困ったことに当たるのである。

「少し、胸元は詰め物をしたほうがいいわね。おしりの周りもかさましするけど大丈夫？」

「お任せします」

ぎゅっぎゅっとうと帯を締めつけられ、裳の丈や袖の長さを調整する桜花はさらにとどめをさしてくれた。

「ちゃんと、お化粧もしないとね。たまには、そばかす隠す努力もしなさいよ」

にやりと笑う桜花に、ひきつる笑顔を返したのはいうまでもない。

## 17 園遊会準備

紅娘ホンニヤンから園遊会の流れを聞いてげっそりとした。

彼女は、昨年春の園遊会に出席しており、

「今年はなくて、安心していたのに」

と、ふうつと、ため息をつく。

なにをするわけでもない。ただ、立っていればよいのだ。

あくまで妃はお客様側の立場であり、ただ皇帝に付き従っていればよい。その侍女たちも同じくだ。

演武に演舞、詩歌に二胡といった出し物を見、出された食事を食べて、適当に挨拶に来る官たちに笑顔を振りむけばよいだけである。

空っ風の吹く屋外で。

庭園はまあ皇帝の権力に比例するごとく無駄に広い。

ちよいと御手水にでかけようものなら、四半時は必要となる。

主賓たる皇帝が座を立つことはなく、妃たちもそれに従うしかない。

（鉄の膀胱が必要になるな）

春先の園遊会でまいるくらいなら、冬はどんなものになるやら。

そこで、猫猫マオマオは肌着ボケットに衣嚢をいくつも付け、中に温石カイロを入れるよう

にした。また、生姜とみかんの皮を細かく削り、砂糖と果汁で煮て飴にした。

肌着と飴を紅娘に見せたところ、目を潤ませて全員分作るように頼まれた。

作っている最中、暇人宦官が来て自分のも作れと言ってきた。その従者もなにやら言いたげなので仕方なく一緒に作ってやった。

また、夜の御通りの際、玉葉妃キョクヨウが皇帝に話したらしく、翌日、皇帝直属のお針子と食事係がきたので作り方を教えてあげた。

なるほど、よほどの苦行らしい。

おかげで園遊会まで、内職で終わってしまった。

前夜によやく手が空いたので、手もとにある薬草で薬を作ることにした。

「おきれいです、玉葉さま」

桜花インファたちの言葉は、世辞で言っているのではない。

(さっすが、寵妃というだけあるな)

異国風情の漂う妃は、紅の裳と薄紅の着物を着ていた。上に羽織る大袖は裳と同じ紅で、金糸の刺繍が入っている。髪は大きく二つの輪に結わえられ、二つの花かんざしと真ん中に冠が乗せられている。花かんざしから銀の筭が伸び、先に赤い絹の房飾りと翡翠の玉が下

がっていた。

意匠デザインが派手なのに服に着られることがないのは、玉葉妃だからである。  
ろう。

燃えるような赤い髪を持つ妃は、国で一番紅が似合うものだと言われている。また、赤の中に翡翠色の瞳が輝くのも、神秘的な空気を漂わせていた。

猫猫たちの裳に薄紅を使うのも、それに従っているという意味だ。

互いに揃いの衣をつけ、髪を結う。

玉葉妃はせっかくだからと、自分の化粧台から飾り箱を取り出した。中には翡翠のついた首飾りや耳飾り、簪が入っていた。

「私の侍女たちだもの。変な虫がつかないように、所有権をつけとかないと」

そういつて、それぞれの髪や耳、首に飾りをかけていく。  
猫猫には玉のついた首飾りをかけてくれた。

「ありがとうございます……」

(ひっ！)

礼を言い終わる前に、後ろから羽交い絞めにされた。  
桜花インフラががっしり腕を回していた。

「さあてと、お化粧しないとね」

刷毛を持ちにやにやするのは、紅娘である。他の二人の侍女もそれぞれ貝の紅入れと筆を持っている。

このところ先輩侍女たちが猫猫に化粧をさせようと息巻いていたのを忘れていた。

「うふふ、可愛くなってらっしゃい」

共犯者はここにもいたようだ。玉葉妃はころころと鈴の鳴る声で笑う。

動揺の隠せない猫猫に四人の侍女たちは容赦ない。

「まず、顔を拭いて、香油を塗らなくてはね」

がしがしと濡れた布で猫猫の顔を拭いた。

『えっ?』

(あーあ)

顔と拭いた布を見比べながら、侍女たちは間抜けに声がそろった。

(ばれちゃったか)

ここでひとつ言っておく。

猫猫が化粧を嫌がった理由は、化粧が嫌いというわけでない。苦手というわけでもない。

むしろ、得手不得手なら得意といえる。



ならば、なんだといえ、すでに化粧を済ませた顔だったからである。

濡れた布には薄茶の汚れがついていた。

皆がすっぴんだと思っていた顔は、実は化粧メイク後の顔だったわけである。

18 化粧

園遊会が始まるまであと半時いちじかんというころ、玉葉妃ギョクヨウと侍女たちは庭園の東屋で時間待ちをしていた。

池には色とりどりの鯉がはね、赤く染まった紅葉が残り少ない葉を散らしていた。

「あなたのおかげで助かったわ」

日の光は十分だが、風が冷たく乾いている。普段ならぶるぶると震えるしかないのだが、温石カイロをつけた肌着のおかげで皆それほど苦はない。

心配だった鈴麗リンリー公主も、籠の中で丸まっている。籠の中には同じく温石を入れている。

「公主のものは時折外しては布を巻き替えてください。低温やけどになる場合がありますので。あと、飴は舐めすぎると口内がひりひりするので気を付けてください」

猫猫マオマオは替えの温石を手籠の中に入れている。公主のおむつや着替えもその中にある。

「わかったわ。それにしても」

ふふふ、と悪戯っぽい笑いが漏れる。他の侍女たちも苦笑する。

「あなたは私の侍女なんだからね」

と、翡翠の首飾りを指さした。

「ちよつでございませす」

猫猫は言葉のままとらえることにした。

高順ガオシユンは、徳妃のご機嫌をうかがう主を眺めていた。

天女の微笑みと天上の甘露を持つ壬氏ニンシは、美姫と謳われた徳妃よりも艶やかであった。

普段の簡素な官服から、いくらか刺繍を加えて、髪に銀の簪をさしただけなのに、絢爛豪華な衣をまとう妃をかすませてしまふ。

ここまで来ると嫌味な存在であるが、かすんだ妃本人が目潤ませつつとりにしているので問題ないだろう。

まったく罪な人間である。

三人の妃たちを回り、次に玉葉妃のもとに向かう。

池の向こうの東屋にいるのを見つけた。

四夫人に対して平等に接すべき壬氏であるが、最近、どうにも玉葉妃の肩入れが強い。まあ、皇帝の寵妃ということとそれほど問題視すべきでないが、理由は他にもあるのは明確だ。

妃に礼をする。赤い衣がよく似合うとほめる。

たしかに、似合って美しい。胡姫の神秘さと生来のあでやかさが空気にまで混じるようである。

おそらく、後宮内で王氏に見劣りしない人物といえば、玉葉妃くらいだろう。

だからといって、周りの女官たちが美しくないわけではなく、各々自分の魅力を引き出していた。

王氏のすごいところは、それを明確に口にするところである。

誰もが自分が気に入っている部分を褒められたい、そこをうまくつくのだ。

王氏は嘘をつかない。

ただ、本当のことを言わないだけで。

平静を装っているようだが、左の口角がわずかに上がっている。長年、仕えてきた従者にはわかる。玩具を目の前にした子どもの表情である。

公主の顔を見るように見せかけて、小柄な侍女に近づく。

が。

そこには無表情でどこか見下したかのようなあまりに不遜な顔をすく、見慣れない侍女がいた。

「しぎげんよう、王氏さま」

また来たのか、暇人野郎、という顔を表に出さないように気を付ける。

高順が見ているので、できるだけ穏便にいききたい。

「化粧しているのか？」

「いいえ、していませんけど」

口とまなじりに紅を入れているだけであとはすっぴんだ。鼻の周りに薄ら斑が残っているが気にするほどでもない。

「そばかすが消えているぞ」

「ええ、消しましたから」

残っているのは、昔、自分で針を刺して入れた黥げいである。深く刺さず、薄い染料でつけたそれは一年ほどで消えてなくなる。たとえ、消えるとはいえ罪人の刑と同じことをするのに、おやじどのは難色を示していた。

「化粧して消したんだろ？」

「化粧を落としたから消えたんですよ」

(あー、適当にはいはい言っとけばよかったかな)

猫猫は、返答を間違ったことに気が付いたがもう遅かった。

「おまえの言っていることはおかしいぞ、矛盾している」

「いいえ。そんなことはありません」

化粧とはなにもきれいにするだけのものではない。既婚の女がわざわざ醜くなるように化粧をする場合もある。

乾いた粘土と染料を溶いたものを、猫猫は毎日鼻の周りにつけていた。刺青のそばかすをぼやかすと、うまい具合にしみのようになる。まさか、そんなことをやっているとは思わず、誰も気が付かなかっただけだ。

そばかすとしみを持った特に特徴のない顔の女。  
だから醜女と呼ばれていた。

逆を言えば、そばかすもしみもなければ、ただの特徴のない、つまり平均的な整った顔立ちであることが言える。  
それはほんの少しの紅でも、雰囲気が変わり、普段の猫猫とはまったく違う顔ができていた。

猫猫の説明に、なんだか理解できないという風に、王氏が頭を抱えている。

「なんで、そんな化粧をするんだ？意味あるのか？」

「ええ、路地裏に連れ込まれないためです」

花街とはいえ、女に飢えた奴らもいる。そいつらは、大抵金も持たず、暴力的で、中には性病持ちも多かった。  
当然、ごめんこうむりたい。

ぽかんとした王氏がなぜか恐る恐る聞いた。

「連れ込まれたのか？」

「未遂ですよ」

いわんとした言葉がわかったため、半眼でねめつける。

「かわりに人買いにかどわかされましたけどね」

後宮に売りとばす女は見目よいほうがいい。あのとき、たまたま化粧を忘れて薬草を取りに行ったのだ。薄れてきた刺青の染料をとるために。

「悪いな。管理が行き届いてなくて」

「別に、かどわかしの身売りと口減らしの身売りの区別なんてつかないだろうから、どうでもいいですよ」

前者は犯罪で、後者は合法にあたる。たとえば、かどわかしても買った人間がそれを知らなかったといえ、罰せられることはないのだ。

今現在、後宮でそんな化粧をしているのは、文字を書けることを隠していたのと同じ理由である。今更、どうでもよくなったわけだが、いきなり素顔になるのも時機タイミングがわからずこのままだけでいただけにすぎない。

「ああ、申し訳なかった」

(珍しく素直だな)

見上げようとすると、頭にさくつと何かが刺さった。

「痛いのですが」

「そうか、やる」

ただの甘ったるい笑みではなく、どこか憂いと気恥ずかしさの混じった顔があった。

頭を触ると、何もつけていないはずの髪に冷たい金属の感触がする。

「じゃあ、あとは会場でな」

後姿のまま、壬氏は東屋を去った。

刺さっていたのは男物の銀の簪だった。

「あー、いいなあ」

桜花イシフタがもの欲しそうに見ていたのであげようと思ったが、他のふたりも同じ顔をしていたので手を引っ込めるしかなかった。  
紅娘ホンニヤンは苦笑している。

「もう、早速約束破ったのね」

玉葉妃がすねた顔をしている。

猫猫の持っていた簪を取ると、結わえた頭にきれいに刺してくれた。

「私だけの侍女じゃなくなっただじゃない」

幸か不幸か、猫猫は宮中、特に上流階級の話に疎い。

それが示す意味もわかっていなかった。



## 19 園遊会その巻

園遊会は中庭に設けられた宴席にて行われる。大きな東屋に緋毛氈が敷かれ、長卓が二列に並べられ、その先に上座が設けられている。

主上を上座とし、両脇に皇太后と皇弟、東側に貴妃、徳妃、西側に賢妃、淑妃が座する形となる。東宮が身まかれた現在、現帝の同腹の弟が、第一継承権をいただいている。

それにしても、喧嘩を売るためだけの配置にしか思えない。

その弟君であるが、母が皇太后であるにもかかわらず日の目を見ない生活をしている。

表向きこうして上座に席を設けられているが、空席である。病弱でほとんど自室から出ず、執務も行わない。

一部では、歳の離れた弟を皇帝が甘やかしているだとか、もしくは幽閉しているだとか、それとも皇太后がかわいがり過ぎて外に出したくないとしているのか、いろんな憶測も回っている。

まあ、マオマオ猫猫には関係ないことである。

料理が出るのは昼過ぎであり、今は曲芸や演舞を楽しんでいる。

キョクヨウ玉葉妃には、侍女頭のホニヤン紅娘のみついており、なにか用がない限り他の侍女たちは幕の裏側で指示を待つのだ。

公主は皇太后があやしていた。

(いつそテント天幕を用意してくれ)

幕といってもまさに目隠し程度なので、風よけにもならない。

懐炉を持った猫猫たちが、寒いと思うのに、それが他の妃の侍女た

ちとくればたまらないだろう。

案の定、控えている他の侍女たちは身体を小刻みに震わせ、中には内股になっているものもいる。今のうちに厠に行けば問題ないと思うが、他の妃の侍女の手前に行くにいけないところかもしれない。

困ったことに、四夫人の侍女たちは主たちの代理戦争をしたがるのである。

各々いさめる立場にある侍女頭はそれぞれの妃のそばについている。止めるものはいなかった。

今現在、抗争の図は『玉葉妃軍対梨花妃軍』、『淑妃軍対徳妃軍』である。

ちなみに、玉葉妃軍営は総勢四人なので、向こうの侍女の半分もいない。いささか不利かと思われるが、桜花イシフタががんばっていた。

「はあ、地味ですって？馬鹿じゃないの？侍女ってものは、主に仕えるものでしょ。無駄に着飾ってどうするのよ」

どうやら衣装のこともめているらしい。向こうの侍女たちの衣装は、梨花妃に仕えるということ、青基調、ひれがついているのと飾りものが多いのでこちらよりも派手である。

「なにいつてんの？見た目が悪いと、主が苦勞するのよ。やっぱりあの不細工を雇ってるだけのことはあるわー」

（おっ、目の前で莫迦にされているようだ）

他人事のように猫猫が思った。言うまでもなく、不細工というのは

自分のことである。

偉そうに胸を張る女官は、以前、猫猫に反発していた一人だった。強気な性格だが、それに根性は付随しておらず、ことあるごとに「お父様に言いつけてやる」と言っていたのだ。あまりにうるさいので売り言葉に買い言葉で、「じゃあ、言いつけられない身体にしてやる」と言ったら怯えて近づかなくなったのだ。

（妓女流の冗談は通じないのか）

少なくとも世間知らずのお嬢様には向かない言葉である。

「いないとこ見ると、置いてきたんでしょ。あんな醜女連れて来たら恥もいところだものね。玉飾りの一つももらえないでしょうし」まったく猫猫のことに気が付いていないらしい。

（ひどい話だ。二か月も一緒にいたというのに）

桜花が爆発して飛び掛かりそうなのを残り二人がおさえているのを見ると、そろそろ静かにさせたほうがよさそうである。

猫猫は桜花たちの後ろにまわり、鼻を手のひらで隠して青い衣を着た侍女たちのほうを見た。

怪訝に目を細めた侍女が、何かに気が付くと隣の侍女に耳打ちする。でんこんゲーム伝言遊戯のように、最後の意張りくさった侍女に届くと、侍女は威圧して突きだす指先をふるふるとさせ、口をあわあわと開いた。

（ようやく気が付いてくれたか）

猫猫は自分なりに満面の、侍女たちから見れば獲物を狩る狼のような笑みを作る。

「あ、ああ、ああっ」

「なっ、なによ」

後ろでにやにや猫猫が笑っていることも知らない桜花は、いきなり小動物みたいに震える敵対者をいぶかしむ。

「あっ、ああ。も、もうこれくらいにしてあげるわ。か、感謝しなさい」

と、わけのわからない捨て台詞を吐いて、幕の端に向かった。他に場所は空いているだろうに、猫猫たちと一番離れた場所に向かうのである。

ぽかんと呆気にとられる桜花たちと、

( やっぱり、傷つくなあ )

などと思う猫猫。

気を取り直し、桜花は猫猫に視線を合わせて、

「もう、前からやな奴らだと思ってたけど。悪かったわね、不愉快な思いをさせて。本当はこんなに可愛いのに」

すまなそうに桜花が言った。

「気にしていないので。それより、温石かえなくてよろしいですか」  
「ええ、まだ温かいし、大丈夫。それにしてもなんでいきなり震えだしたのかしら？」

「さあ、お花摘みにも行きかけたものでは」

いけしゃあしゃあと猫猫は言った。

ちなみに、現在の猫猫は、親に折檻され身売りに売られて捨て駒の毒見役になった、に加えて、水晶宮で二か月間壮絶ないじめを受け、自分の顔を汚したくなるくらいひどい男性不信に陥っている少女という設定になっている。

困ったことに桜花たちの妄想力は年相応に半端ないのである。

壬氏が猫猫に突っかかるのも、天女のような御仁が可哀そうな娘を気にかけているという図に描きかえられているので困ったものだ。

どこをどうみればそうなるのか不思議なものである。

一方、もう一つの代理戦争はいまだ続いていた。

人数は、七対七。

白い衣装を着た侍女たちと暗色の衣装を着た侍女たちである。前者は徳妃、後者は淑妃側の侍女である。

「あそこも仲悪いわよね」

しみじみと桜花が言う。

「齡十四と齡三十五。同じ妃でも親子ほど年齢がはなれてたらそりも合わないわよね」

「若輩の徳妃に、古参の淑妃。そりゃあ、ねえ。いろいろあるものね」

おっとりした侍女、貴園グイエンが言った。

「そうよね、元嫁姑だし」

長身の侍女、愛藍アイランも頷く。

「嫁姑？」

なんだか後宮らしからぬ話に聞こえる。猫猫は首を傾げた。

「ええ、ちよつと複雑なんだけどさ」

二人は先帝の妃と東宮妃の関係だったという。

先帝が身まかられたとき、妃は喪に服するため道士となった。

しかし、それは建前で、俗世を一度捨てることで先帝に仕えたことをなかつたことにして、今度は息子に嫁いだという。

（先帝の時代は五年前）

そのとき、徳妃は齡九つ、たとえ政略でもなんだかもやつとくる話である。この年で妃になるとは。

(いくら好色でもそれはないよな)

美髭の皇帝を思い出し、云々言っているところで衝撃の真実を知ることになる。

「ありえないわよね。九歳のお姑さんなんて」

愛藍は耳を疑うようなことを言ってくれた。

20 園遊会その弐(前書き)

モテ期です。



## 20 園遊会その貳

徳妃、<sup>リーシュ</sup>里樹の第一印象は、空気が読めない子であった。

宴の第一部が終わり、休憩時間がもうけられると<sup>マオマオ</sup>猫猫と<sup>グイエフ</sup>貴園は公主のもとへと向かう。貴園が冷たくなった温石を取り換えるあいだ、猫猫は赤子の容体をみる。

(特に体調は悪くないか)

きゃっきゃと林檎のような頬をした<sup>リンリー</sup>鈴麗公主は、最初に出会ったころよりもずっと表情が豊かで、父たる帝からも、祖母たる皇太后からも可愛がられていた。

(しかし、こんな屋外にずっといるのはどうよ?)

これで風邪でもひかせれば、首がとぶかもしれないのでまったくもって理不尽である。

おかげで、籠に職人を使ってわざわざ蓋をつくり、まるで鳥の巣のようなねんねをつくる羽目になった。

(まあ、可愛いからいいか)

子どもが好きではない猫猫でも可愛いと思うのだから、赤子とは恐ろしい生き物である。

はいはいをするようになって、外に出たがる公主をやりわりと籠の中に入れ、<sup>ホンニャン</sup>紅娘に渡そうとすると、後ろから荒い鼻息が聞こえてきた。

絢爛豪華な濃い桃色の大袖を着た、若い娘がこちらを見ていた。後ろに幾人もの侍女を連れている。愛らしい顔をしているが、口をとがらせて自分の不機嫌を見せつけているようである。

（これが幼姑？）

紅娘と貴園が深く頭を下げているのでそれにならう。

里樹妃はやはり不機嫌な顔のまま、侍女を連れてどこかへ行つた。

「あれが徳妃さまですか」

「ええ、そうなの。まあ、大体見てわかったと思うけど」

「いろいろ読めないんでしょうか」

なにがといえ、その場の空気である。

四夫人ともなれば、それぞれ己が象徴を与えられる。

玉葉妃ギョクヨウであれば、真紅と翡翠を象徴とし、梨花妃リファであれば、群青と水晶、淑妃はたぶんお付の衣の色から黒だろ。柘榴宮に住んでいるので、宝石は柘榴石といったところか。

（五行からとっているとすれば、白が妥当なんだけど）

里樹妃の着ていた衣は濃い桃色で、いふなれば玉葉妃の赤い衣とかぶっている。宴席の席順を見ると、玉葉妃と里樹妃は隣り合っており、一目見て色のつり合いが悪いのである。

(そういえば)

遠巻きに聞こえてきた女官同士の喧嘩も、そんな話題だった気がする。

「なんていうか、まだ幼いのよね」

深くため息をつく紅娘の一言がすべてを物語っていた。

温石のぬるくなったものは、あらかじめ用意していた火鉢に入れた。遠巻きによその侍女たちが見ていたので、玉葉妃に了解をとっていくつか渡してあげることにした。

絹や宝玉に見慣れた侍女たちが、たかだか温めた石くらいで喜ぶのだからなんだかおかしいものである。

残念なことに水晶宮の侍女たちは、猫猫が近づくとまるで磁鉄が反発するように一定の距離を置くので渡せずじまいである。

「なんだかんだでお人よし過ぎない？」

桜花インフアが呆れたようにいうので、

「そういえばそうかもしれません」

思ったことを素直に伝えた。

(そういえば)

休憩になってから、どうにも裏幕に人通りが多い。  
侍女だけでなく、武官や文官が入り込んでいるようだ。  
皆、片手に装飾品を持っている。

女官と一対一で向かい合っているものもいれば、数対一で囲まれて  
いるものもある。

貴園と愛藍アイランも知らない武官と話しているようだ。

「ああやって、花の園に隠れた優秀な人材を勧誘するのよ」

「はい」

「印にああやって装飾品を渡すの」

「そうですね」

「まあ、違う意味もあるんだけどね」

「なるほど」

いつもと違って、興味なさそうに返事するので桜花は腕組みをして  
唇を尖らせた。

「違う意味もあるんですってばー」

「そうなんですな」

その意味を聞き出そうともしない。

「じゃあ、その簪かんざしちょうだい」

「はい。でも、他の二人と猜拳じゃんけんしてくださいね」

火鉢の温石をひっくり返しながらいった。

二年の奉公が終えたらさっさと花街に戻るつもりの猫猫には関係な

い話である。

それよりも、

（あんなのにこき使われるのなら、水晶宮で丁稚してたほうがましだな）

と、息絶えた蝉でもみるような目をしていると、

「お嬢さん、これをどうぞ」

目の前に簪が差し出された。

顔を上げると精悍な顔をした大男が甘い笑みを浮かべている。まだ、若く髭はない。男前といわれる部類の顔をしているが、無駄に甘い笑顔に耐性の強い猫猫としては、何の感慨もなく見返すだけだった。思った反応と違うことを武官は感づいたようだが、差し出した手はおさめられずにいる。中腰につま先立ちなので足元が震えている。

猫猫はどうやら男を窮地に立たせているのが自分だと気付いたらしい。

「どうも」

猫猫が受け取ると、子犬が飼い主にほめられたような顔をした。なんとなく駄犬っぽいと猫猫は思う。

「んじゃあなー、よろしくー。俺、李白<sup>リハク</sup>っていうから」

(たぶん、二度と会わないと思うけど)

手を振る大型犬の帯にはまだ十数本の簪がさしてある。侍女たちに恥をかかせないため、皆に配っているのだろうか。

(それならば悪いことをした)

桃色珊瑚のついた簪をながめると、

「もらったの？」

と、貴園たちが来た。各々戦利品を帯にさしている。

「参加賞ですが」

猫猫は感慨もなく答えた。  
すると、後ろから、

「それだけでは、さみしいでしょう？」

と高貴な声がする。

振り返ると、豊満な胸部、もとい梨花妃が立っていた。

(少し太ったかな)

それでも、以前の肉体には及ばない。しかし、残った陰りもまた妃の美貌を引き立てていた。濃紺の袷に空色の上着、青い肩掛けを羽織っている。

(少し寒くはないだろうか)

玉葉妃付である限り、梨花妃には肩入れができない。

水晶宮を去った後も王氏ジンシ伝手にしか、容体をきいたことがなかった。たとえ、宮を訪れても侍女たちに門前払いを食らうのはわかっていたが。

「お久しゅうございます」

「お久しぶりね」

顔を上げると、梨花妃は猫猫の髪をさわる。

また、王氏のときと同じように何かがささった。今度は痛くないが。

「じゃあ、ごきげんよう」

驚愕を隠しきれない妃付の侍女たちをたしなめながら、優雅に去って行った。

「あーあ。これは玉葉さま、すねるところじゃないかもね」

桜花が呆れた顔で簪の飾り部分をはじいた。

紅水晶の玉飾りが三つ連なり揺れていた。

## 21 園遊会その参

昼食時間になると、猫猫<sup>マオマオ</sup>は、紅娘<sup>ホンニヤン</sup>と交代し玉葉妃<sup>ギョクヨウ</sup>の後ろについた。

桜花<sup>インフア</sup>の助言を聞いて、とりあえず貰った三本の簪はすべて帯につけることにした。玉葉妃のくれたのは首飾りなので、簪は一本くらいつけていてもいいのだが、それではつけなかった簪と優劣がつくとのこと。

あらためて宴席を上座から眺めると、なかなか壯観である。

西側に武官が並び、東側に文官が並んでいる。長卓に座れるのはその中の二割ほどで、高順<sup>ガオシュン</sup>も武官側の席に座っていた。思ったよりお偉いさんなのはわかったが、宦官が違和感なく並んでいることに驚いた。

さつきいた大男も座っている。高順よりも末席に近いが、年齢を考えると出世頭なのかもしれない。

王氏<sup>ワンシ</sup>は反対にどこにも見えない。あれだけきらきらしていたら、すぐ見つかりそうなものなのに。

探す必要もないので、本業に徹することにした。

最初に食前酒がきた。玻璃の器から銀杯に少しずつそそがれる。

ゆっくり杯を揺らし、接触部分に曇りがないか目視する。

砒石の毒があれば、色が黒ずんてくる。

ゆっくり回しながら匂いを嗅ぎ、口に含む。毒のないことはわかる



が、毒見役として嚥下しなければ、毒見として認められない。ごくくと喉を潤すと、真水で口をゆすぐ。

(おや)

どうやら注目されているらしい。

他の毒見役はまだ、杯に口もつけていない。

猫猫が何も無いのを確認すると、恐る恐る杯に口をつけるのだ。

(まあ、普通はね)

誰もが死ぬのは怖い。

誰か先にやるのであれば、見届けてからやったほうが安全である。

(宴席で毒を使うとすれば、即効薬しかないだろうし)

この中で好んで毒を食らうのは猫猫くらいである。世の中にそうはいない希少な人種である。

(どうせなら、河豚がいいなあ。内臓をうまく羹に紛れ込ませて)

あの舌の先がしびれる感じがたまらないとか考えているうちに、前菜を持ってきた侍女と目があつた。口角が上がっている。気持ち悪くにやにやしていたようだ。完全に引かれているようである。

いつもの無表情に顔を戻す。

受け取った前菜は、皇帝の好物で夜食にたまにでていたものだ。

他の毒見たちが猫猫をじつと見るので、さっさと箸をつけてやる。

魚と野菜のなますだ。

好色親父であるが、案外食生活は健康志向だと、毒見役はいつておく。

（配膳間違えたな）

いつもと具が違う。

皇帝の好物の調理法を間違えることはない。

あるとすれば、別の妃用に作られたものがこちらにきているのだらう。

後宮の尚食は有能で、同じ献立でも皇帝用と妃用と作り分けている。玉葉妃が授乳中はずっとお乳によいメニューを作っていた。

毒見が終わり、皆が前菜を食べているところをみると、やはり配膳を間違ったらしい。

空気の読めない里樹妃が青白い顔をしている。

（嫌いなものだったか）

皇帝の好物という手前、残すわけにいかないものである。我慢して食べている。

後ろを見ると、毒見役の侍女が目を瞑り、唇を震わせていた。微かに弧を描いているのは、見てわかった。

（嫌なものを見た）

視線を戻し、次の料理を受け取った。

ただの宴席ならばよいのに。

李白<sup>リハク</sup>は殿上から見下ろす高貴なかたとはそりが合わないと思った。

なにが楽しゅうて、この寒い中、風が吹きすさぶ中、外で宴会など考えるのだらう。

いや、ただの宴会ならいい。古事にならうて、桃の園のなかで気の合う同士で酒を食らい、肉を食むのはさぞや楽しかるう。

しかし、高貴なおかたとともにになると、常に毒ともご一緒になる。いかに高級素材を使い、秘伝の技を駆使した会席も毒見を終えて冷えればうまさは半減する。

毒見を責めるわけではないが、毎回、怯えた青い顔でゆっくりと匙を食むさまは、それだけで胃の大きさを縮めるのだ。

今日もまた、同じように無駄に長い時間が過ぎるのだと思っていた。だが、なんだかそうでもないらしい。

いつもは、毒見役が皆、顔を見合わせながら匙を運ぶ順を決める。でも今日は、やたら威勢のいい毒見役がいるようだ。

貴妃の毒見役、小柄な侍女は周りを一瞥もせず、銀杯を揺らして食前酒を口に含む。

ゆっくり嚥下すると、何事もなかったかのように口をゆすいだ。

どこかで見たことがあると思つたら、先ほど簪を渡したひとりだつた。さして、目だった容貌でない、整つてゐるが特徴がない。美形の多い後宮の女官の中ではあまたに埋もれるほうだろう。

しかし、無表情のどこかに、他人を威圧する眼力を持つ娘だった。

愛想のない娘だと思つたが、表情は案外豊からしい。

無表情と思えば、なぜかいきなりにやにやして、かと思えば元に戻り、今度は不機嫌な顔をする。

それなのに、当たり前のように毒見をするので、これはどうにもおかしかった。

次はどんな顔をするやら。暇つぶしにはちょうどいい。

羹を差し出され、娘が匙をいれる。目視し、舌の上にゆっくりのせる。

娘の目が一瞬、見開いたかと思えば、急にとろんと蕩けるような笑みを浮かべた。

頬に赤みがさし、目が潤み始める。唇が弧を描き、半開きになった口から白い歯と艶めかしい舌が見えた。

これだから女は恐ろしい。

唇についたしずくを舐めとるさまは、熟れた果実のような最高級の妓女の笑みであつた。

どれだけ美味しい料理なんだ。

平凡な娘をあれだけ妖艶にするなにかがあるのだろうか、宮廷料理人の匠の技によるものか。

ごくりと生唾を飲んだ時、娘は信じられない行動にでた。

懐から手ぬぐいを取り出し、口につけると食べたものを吐き出した。

「これ、毒です」

無表情に戻った侍女は、業務事項を伝えると幕の裏側に消えていった。

宴席はどよめきをみせながら終わりを告げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9636x/>

---

薬屋のひとりごと

2011年11月6日01時30分発行